

報告書第29号

1-02

学校の教育目標の具現化に関する研究(2)

学校の教育目標の具現化に関する研究(2)

1984・3

山形県教育センター

1984年3月刊

学校の教育目標の具現化に関する研究(2)

山形県教育センター

目 次

I 研究の趣旨

- 1 研究のねらい
- 2 研究の趣旨

II 研究の手続

- 1 研究の手順と方法

III 学校の教育目標の実現へのせまり方

- 1 目標を実現するための学校経営(教育活動と運営活動)
 - (1) 学校の教育目標を実現するみちすじの全体構造
 - (2) 教育活動と運営活動の一体化
- 2 学校の教育目標を具体化する過程
 - (1) 学校の教育目標の具体化についての基本的な考え
 - (2) 学校の教育目標の具体化
 - (3) 運営目標の具体化
- 3 学校の教育目標を実現する過程
 - (1) 学校の教育目標の実現化
 - (2) 学校の教育目標を実現する過程と運営活動

IV 研究のまとめと今後の課題

- 1 2年次の研究の要約
- 2 2年間の研究の総括
- 3 今後の課題

研究の概要

1 研究の目的

県内の小学校にみられる経営実践の解析をととして、学校の教育目標を実現するみちすじについて明らかにする。

2 研究の経過と方法

この研究は、昭和57年度の「学校の教育目標の具現化に関する研究」を受け継いで行ったものである。1年次は、学校の教育目標の具現化に関する実態調査を行い、その傾向をとらえて課題を明らかにした。今次の2年次は、昨年度からの課題である教育目標と実践と評価等との関連をどうはかるかを研究の糸口として研究を深めることとした。

ここでの究極のねらいは、学校の教育目標を実現するみちすじを明らかにすることである。目標の実現とは、児童をいまのある状態から意図する状態まで、教え、導き、育てあげること、児童の立場というなら意図したことが行動となってあらわれることである。

そこで、この研究をすすめるにあたりある小学校の実態をもととして、教育目標の設定から目標の実現までのみちすじについて、十分なる吟味をおこない、1年間の時間の経過に合わせ、仕事の手順、内容等を克明にあらわしてみた。そして、これらの手法や手段が目標の実現に役立つかどうかを確認づけるため県内の実践校を対象に聴き取り調査を行った。

3 研究の内容

(1) 学校の教育目標を実現するための学校経営（教育活動と運営活動）

校長をはじめ教職員が組織としてつくりあげる教育力を教育活動（授業）に結集しなければならない。このことがとりもなおさず学校経営そのものになる。ここでは、経営内容を教育活動と運営活動という二つの形であらわし、この両者が一体の関係にあらねばならないことについて考察した。

(2) 学校の教育目標を具体化する過程

目標の実現は、児童が日々充実した教育活動を実践することにより見いだされる。さきの研究の経過と方法から教育目標として三つ設定した。この目標を教育活動にどう反映するかであるが、まず教育目標から具体目標を導き、ついで学年・学級目標と教育課程へそれぞれ具体化する手法について考えてみた。

(3) 学校の教育目標を教育活動をととして実現する課程

児童と教師が一体となり充実した授業を創造することにより目標の実現が可能になる。それには教師がどれだけ目標を意識した授業を展開しているかがかぎとなる。そこで、教科、道徳、特別活動等について学習指導案をどうたてて授業を仕組むか等について考えてみた。

(4) 今後の課題

目標の実現には欠かすことのできない目標に対する教職員の共通理解から認識、そして協力体制の確立等に焦点を当て、学校経営への参画という視点と授業の視点とをつき合わせながら研究をする必要がある。

は し が き

当教育センターは、昭和57年度から学校の教育目標の具現化に関する研究に取り組み、その第1報を公にした。本県内においても学校の教育目標の具現化を図ることが学校経営の主要な役割であることの認識に立って、実践に取り組む学校が現われてきたことは、誠に喜ばしいことである。

現在、学校教育は国民から多くのことを問われている。国民の教育に対する厳しい批判と期待に応えるためには、もちろん一人ひとりの教師が真にその専門性に立ち、未来を正しく洞察する眼と教育に対する熱情を持って教育活動に取り組むことが必要なことは申すまでもない。しかし、同時にややもすると伝統的な運営・管理を中心として行われがちな学校経営に、新しい教育経営の考え方を導き入れることが必要なのであろう。

学校の抱えている今日の課題を解決するために、特色ある学校経営とか、地域に根ざした学校経営をすすめることが必要であると言われている。しかし、本県の実情を見るにいろいろな壁に阻まれてその実践が困難を来しているようである。なにが特色なのか、なにが地域の実態なのか、その認識のあり方にも問題は存するが、もう一つは学校の掲げた教育目標について、校長を中心とした全教職員が同じ理解の上に立ち、その実現のための具体的な方策を立て、学校の教育目標を一人ひとりの児童生徒の上に実現させていくために力を合わせていく、そのみちすじと働きのありように大きな問題が隠されているのではなからうかと思うのである。

学校の教育目標の実現を図るための方途については、すでにさまざまな提言がなされている。しかし、本県の学校経営の実情に即して、その改善に迫る根底となり得るものはまだない。この報告書はその谷間を埋めるための手がかりを提供するものである。内容については不十分な点が残っているが、本県における教育の将来的展望に立ち学校経営を確かなものとするために広く活用されるときに、実践を通して厳しく吟味され、建設的な批判をなされることを願ってやまない。

この研究に協力いただいた学校並びに、関係の方々に深く感謝申し上げる。

昭和59年3月

山形県教育センター所長

五十嵐和夫

目

次

I 研究の趣旨	1
1 研究のねらい	1
2 研究の趣旨	1
II 研究の手続	2
1 研究の手順と方法	2
III 学校の教育目標の実現へのせまり方	4
1 目標を実現するための学校経営（教育活動と運営活動）	4
(1) 学校の教育目標を実現するみちすじの全体構造	4
(2) 教育活動と運営活動の一体化	7
2 学校の教育目標を具体化する過程	9
(1) 学校の教育目標の具体化についての基本的な考え	9
(2) 学校の教育目標の具体化	10
(3) 運営目標の具体化	18
3 学校の教育目標を実現する過程	22
(1) 学校の教育目標の実現化	22
(2) 学校の教育目標を実現する過程と運営活動	32
IV 研究のまとめと今後の課題	34
1 2年次の研究の要約	34
2 2年間の研究の総括	35
3 今後の課題	35

I 研究の趣旨

1 研究のねらい

県内の小学校にみられる経営実践の解析をととして、学校の教育目標を実現するみちすじについて明らかにする。

2 研究の趣旨

この研究は、1年次の研究(「学校の教育目標の具現化に関する研究」(1)山形県教育センター研究報告書第24号)を継承し、深めていくものである。

昨年度の研究では、つぎの3点を課題として指摘した。

ア 教育の目標が形式化していること

イ 教育目標と実践・評価等との関連がないこと

ウ 教育目標に関しての教職員の共通理解が十分でないこと

そこで2年次は、これらの課題を解決すべく研究をすすめる。まず、これらがうみだされる背景として、アのことについては、地域の特性やそこに住み生活している児童の実態を正確にとらえないまま、目標を設定していること、イのことについては、目標をたてたが、それを実現するための吟味や手だてのないまま、毎日の教育活動に移していること、ウについては、教職員の学校経営に対する参画意識の弱さが、そのまま共通理解を表層のみにとどめていること、からそれぞれおこり得ると考えることができる。

そこで、研究をすすめる手だてとしてとりあえず三つの課題のうち一つを取りあげ、これを研究の糸口とする。目標の実現とは、児童をある状態から意図した状態にまで教育てることであり、その結果児童の行動に意図したことが具体的にあらわれることである。すなわち、教育てるという教育のいとなみの本来の役割を果たしたことから生ずる具体的なあらわれとみることができるのである。

このことから、研究をすすめる糸口はイの教育目標と実践・評価等との関連をどうはかるかに置き、研究を深めていくこととした。

これは、目標に意図したことがらをどう具体化し、日々の教育活動にどう反映させるか。実践すべきことがらと評価すべきことがらをかざられた時間のうえに、ち密にどう計画をたてることができるか。ち密な計画にそくして教育活動がおこない得るかどうにかかわってくるのである。

こうした実践と評価の一貫した教育活動に研究のメスを入れ課題を解き明かしていくならば、そこにはおのずとアの目標が単なる形式的であってはならないことや、ウの教職員の共通理解の必要なことが明らかになってくるはずである。

このような考えにたち、県内の小学校にみられる経営実践の解析をととして、学校の教育目標を実現するみちすじについて、明らかにすることを企図した。

研究担当者

研究部長	玉田芳蔵
指導主事	船山昂沃
"	保科弘治
"	大泉芳光
"	安藤昭郎

II 研究の手続

1 研究の手順と方法

この研究は、学校の教育目標を実現していくみちすじについて明らかにするものである。このことから、研究をすすめるには具体的な学校の教育目標を用意する必要がある。そこで、具体的な学校の教育目標を設定すること、目標を実現していくみちすじに一貫した現実性をもたせるため、県内のある一つの小学校（T小学校）の実態をもとにして研究をすすめることとした。

（研究の手順）

- (1) T小学校の教育の課題をふまえ、研究担当者の討議結果の合意をもとに学校の教育目標を設定する。設定した教育目標を具体化し、児童の日々の教育活動に反映させる手法及び反映した内容を時間の経過に合わせてち密に計画をたてる手法を明らかにする。
- (2) 上の(1)であみだしたことがらが、教育目標を実現するみちすじとしてもっとも適切な方法であることの価値を得るため、県内小学校のすぐれた実践校を対象に聴き取り調査をおこなう。
- (3) 聴き取り調査の結果にもとづき、(1)と(2)を対比させながら解析をおこない、目標実現のみちすじをいっそう確かなものにする。これら一連の研究を進めていく過程で、昨年度からの研究課題であった目標の形式化のことや教職員の共通理解が十分でないことにもふれ研究を進めていく。

（研究の方法）

研究を進めていくうえで、中心となる研究の課題は教育目標と実践・評価等との関連をどうはかるかで、その具体的な研究方法についてさきの研究の手順と対応させあげてみる。

- (1) 学校の教育目標を設定し目標の実現の手段を明らかにする方法であるが、まず、目標の設定についてあげ、ついで目標実現の手段についてあげる。

前記の研究の手順(1)のことつまり、学校の教育目標の設定においては、ふまえなければならないこと、あるいは手順や手続などいろいろあるが、ここではふまえなければならないことのみを重要視して、つぎの二つに重点を置くことにした。

一つは、公教育をほどこすという立場から国の法令や学習指導要領等からおこる教育の課題は何か。二つは、児童のおかれている地域の特性と児童の実態分析からおこり得る教育課題は何かである。

学校の教育目標の性格からして、目標はかかかって意味をなすのではなく実現してこそ意味をなし生きていくものであろう。ゆえに、設定する目標は児童をある状態から意図した一定の水準まで引き上げることを目ざしているのは当然のことである。

また、目標にはもろもろの価値内容がこめられてくることからどうしても理念的、抽象的な表現にならざるを得ない一面も確かにあるが、だからといって手の届かない校訓的なものでは目標とはいいがたく、できるだけ具体的な姿をもった形にあらわすことが必要であらう。

以上のことから実現を主眼としたT小学校の教育目標を設定することとした。表現の形式は具体的な実践活動を通して目標に迫るということから、……のできる子どもというあらわし方をとった。

（T小学校の教育目標）

- 確かな読みとりで、考えを深める子ども
- 最後まで走りぬいて、心と体をきたえる子ども
- 力をあわせて、みんなのために働く子ども

つぎに、設定した三つの目標を児童と教師の日々の教育活動に反映させる手法を明らかにする。目標をそのままの形で教育活動に反映させようとしても無理がある。なじむまで目標を分析し具体化しなければならない。具体化の手法として二つ考えられ、一つはこれまでにどの学校でもとられ一般化されている、学校の教育目標から具体目標へ、そして学年目標へ、さらにまた学級目標へという手法である。

もう一つは直接教育課程へ反映させる手法である。児童の目標の実現は充実したしかも効果のある教育活動の結果であり、児童と教師が一体となってつくりあげる授業実践からと確信するからである。

指導計画では、この二つの手法を有機的に関連づけ、1年間の時間の経過に合わせて体系的にくみだて、ち密に計画をたててみる。

実践過程では、ち密な計画にそっておこなう授業に教師がどれだけ学校の教育目標を砕き本時の指導目標にとけ込ませ意識して指導にあたるべきかなどについても明らかにしていく。

また、指導の結果、児童にあらわれる価値内容のあらわれ方も見えるところ（知識・理解、技能等）と、見えないところ（人格の形成にかかわる内面的なもの）が予測されるが、見えるところをできるだけ明らかにしながら評価活動と結合させてみる。

これらと並行に、目標の実現の一つの手だてとして児童の教育目標に対する理解のさせ方や自覚の促がし方、保護者や地域の理解と協力を得ることについてもふれていきたい。

- (2) これまでの基本的な考えやあみだした手順や手法をもとに、学校の教育目標を実現していくみちすじとしての価値を確証づけるために、県内の小学校ですぐれた実践をもつ学校を取りあげ聴き取り調査を実施する。

調査を対象とする小学校については、教育目標の実現をはかるみちすじの内容項目等に関し、県内の各教育事務所とも連携しながら、その内容項目にそった学校の特色に着目し17の小学校を選びだした。

そして、これまでのことと聴き取り調査から得た情報を解析し、実現のみちすじをいっそう確かなものにまとめあげていく。

これら一連の研究を進めていく過程で、教育目標の形式化のことや教育目標に関しての教職員の共通理解にかかわることなども随時関連が生じてくることなので、これらの課題をもふくみ研究を深める。

III 学校の教育目標の実現へのせまり方

学校は、学校の教育課題を的確にとらえ、その教育課題の解決をとおしながら、児童を意図する状態にまで教養育てる。そして、この児童の意図する状態をさして教育目標として設定する。

このことは、学校の教育の目的を明確な形にして公開し、公にしらせるおこないでもある。

1 目標を実現するための学校経営（教育活動と運営活動）

目標を実現するには、教育活動と運営活動が一体の関係にあらねばならない。ばらばらはなれた状態でのそれぞれの機能では、目標の実現はおぼつかない。

この研究でいう教育活動とは、児童が主体となり教師とともに目標の実現に向けてつくりあげる授業（教授・学習活動で広義的教育課程「各教科、道徳、特別活動、ゆとりの時間、朝の会・終わりの会、給食、清掃、業間活動、その他の活動等」）そのものをさす。

また、運営活動とは、教職員が主体となり目標を具体化したり、ち密に計画をたて準備をなし、実際に教育活動としておこなうことができるまでの仕事及び、実際の教育活動とそれに伴う一連の仕事をさし、教育活動が教育目標の実現をめざして効率よくおこなわれるように諸条件を整え、活動の活性化を促し支える機能をもつものとする。

(1) 学校の教育目標を実現するみちすじの全体構造

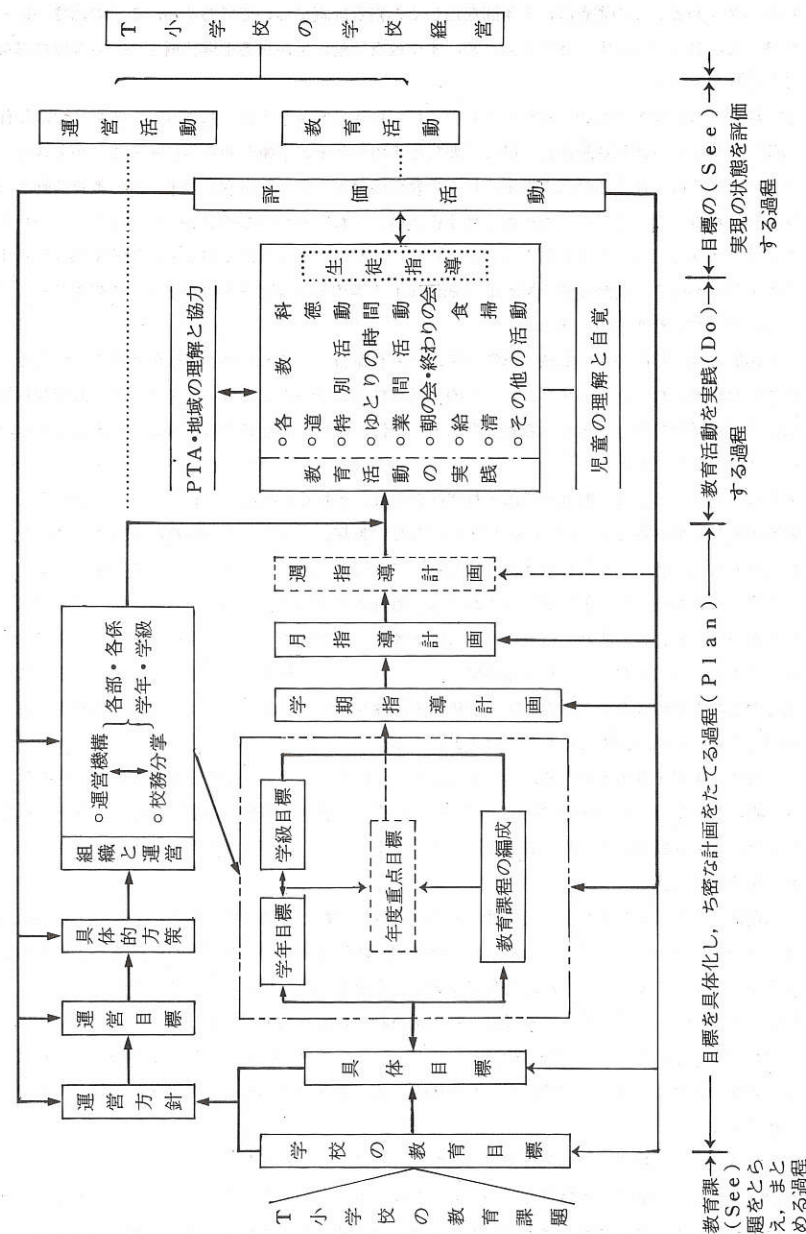
学校の教育目標を実現するみちすじについて、おおまかではあるが明らかにしたものが、P5の図1 目標実現の全体構造がそれである。

目標の実現とは、日々の教育活動を実践した結果、児童が意図した状態に達成することである。そのことから、学校はすべてこの教育活動にもっとも重点をおいた学校の経営をしなければならない。校長をはじめ教職員の組織を結集した教育力を教育活動にむけることである。教育活動の成果が目標の実現というすがたであらわれるよう努力することである。これらのことについて、以下図をもとに述べていくことにする。

①学校の教育目標をそのまま教育活動に反映させなじませようとしても無理があつた。そこで目標を分析して、教育活動に適合するように具体化していかなければならない。だからここにあらわされる具体目標、学年・学級目標、教育課程のそれぞれの目標は、いずれも教育活動をおこなうにふさわしいまとまりと表現をもつものでなければならない。ただここでは、学校の教育目標を分析し直接みちびきだされたことがらのみを具体目標という名であらわし使い分けをしていく。また、これら一連の手順にそって仕事をすすめたとき、いくつかのことが直接全児童にかかわる問題として浮かび上がり、ほおっておけない事態と判断したとき、その年度にあらたにつけ加える目標を年度重点目標としてあらわした。

②つぎに、教育活動に具体化された内容を、時間の経過に合わせて系統だて各学期、各月（できれば各週末でも）に応じた指導の計画をち密にたてることである。この指導計画について昨年度の調査によると、学校の教育目標を指導計画に反映させながらたてている県内の小、中学校は86%ときわめて高い割合を示した。しかし、このことに解析をとおしその実態をとらえれば、はなはだ疑問視せざるを得な

図1 教育目標実現の全体構造



い点は多々ある。この調査は、1年間を通しての指導計画についてであるが、ここではさらにそれを各学期ごと、各月ごとにすっきりとまとめ、すぐ教育活動に生かせる指導計画をつくらなければならないことの提言である。

③学校の教育目標とそれの分析からみちびかれた具体目標等をうけ、運営方針、運営目標、具体的方策、組織と運営という運営活動面における必要な仕事内容とその手順を明らかにすることができる。さきにも述べたように、運営活動とは児童の日々の教育活動が充実した内容と効果のある教育活動となる目標実現への機能と考えれば、それぞれの仕事内容は、それぞれの仕事の立場に立ってこのねらいにそくした中味を吟味していかなければならない。経営の4Mとされる人的(Men)、物的(Materials)、財的(Money)、管理運営(Management)等の有効な活用をはかっていくのもここでの欠かすことのできない仕事内容である。

具体的には、年度当初に組織と運営の決定をみ教職員一人ひとりの職務分担が明らかになる。その分担された職務にたち、年間をみとおしての予見されることがらを、学年・学級目標、教育課程のそれぞれの目標に反映させ、いっそう強固な骨組にし肉付けをして、毎日の教育活動に耐えるち密な計画をつくりあげることである。

④これまでのことから、教育目標はそれぞれの領域、それぞれの指導内容に応じて具体化され、運営活動も必要な仕事内容とその手順も明らかになり、教職員一人ひとりの職務の分担も明確になった。これらをもとに、各学期や各月の指導計画もち密にたてることができたと考えることができる。

さて、ここからが児童主体となっておこなう教育活動のはじまりといつてよい。と同時にこの教育活動とあいまって、評価活動もはじまる。この研究の中心課題である教育目標と実践・評価等の関連になるのである。この課題のおこりうる背景については、さきの研究の趣旨で述べている。そのことをふまえてのこれまでの経過と、この実践・評価等の関連を明らかにしていけば、実現のみちすじは一貫したものとなりいっそう確固たるものになるといえる。

そこで、実践・評価等の関連についてふれると、図1にも示したように教育活動の中味としては、さきにあげた授業そのものをあげた。そのことは、児童と教師が目標の実現という目的を一つにしたかわり合いの場を授業にもとめ、ここでこそ教育本来のいとなみがなされ目標の実現へつながるものと考ええるからである。

問題はこの授業にのぞむ教師の姿勢である。具体化された目標を明確なめあてとして意識しながら授業を展開しているのかどうか。合わせて、授業過程における児童の目標の実現に関する価値内容のあらわれが正しい方向にあるかどうか、等を見きわめ、調整をはかったり、つぎの指導の手だてをこうじたりしているのかどうかである。それには、具体化された内容と指導計画がいつでも使えるようになっていなければならないことと、評価活動においても、いつ(評価の時期)、何を(評価の内容や項目)、何で(評価の基準や尺度)、どのように(評価の方法)等をあきらかにしておかなければならないことは当然である。

またここで、目標の実現に関しあげておかなければならないことは、児童の目標に対しての理解と自覚のうながし方である。教職員だけがいくら力んでも、当の児童が無関心であっては困るのであり、関心をひきおこすだけの動機づけ等の内容をもあらかじめ用意し準備することも忘れてはならない。児童

の理解から認識へ、行動から態度の形成へという児童の立場から明らかにしていくことも意味のある大切な仕事だからである。

以上述べてきたことは、学校内の教育活動を中心にしたことがらについてである。しかし、目標の実現は、学校内の教育活動だけで十分事足りるといいきれないところもある。そこで、学校と家庭や地域との連携、ここでは目標実現に関しての理解や協力のもとめ方等にも一考を要することである。

教育活動と運営活動について述べてきたが、要はこの二つの活動が融合し一つになっているとき、はじめて教育という機能をもつ学校経営といえると確信するからである。

(2) 教育活動と運営活動の一体化

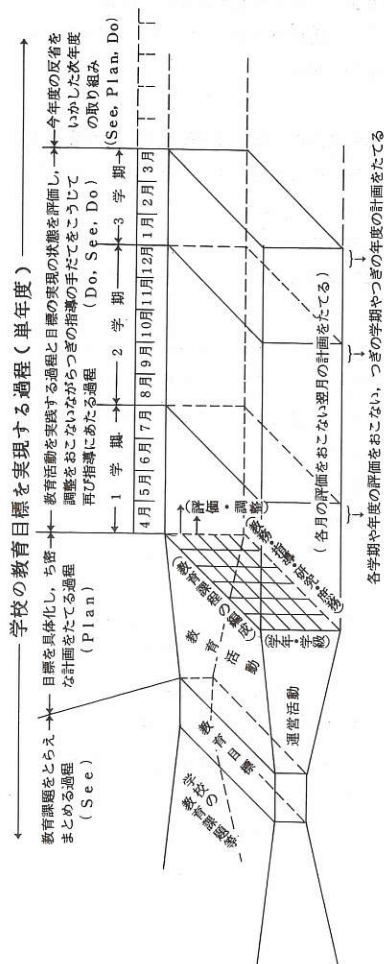
さきに、目標を実現するには教育活動と運営活動が一体の関係にあり、児童の実際におこなう教育活動にもっとも重点をおいた学校経営をおこなわなければならない旨のことを述べた。そのことについてもう少しここで詳しく述べたい。

1年次の調査研究で得た教育目標の実現に関する全体構造図等の資料をみ、目標実現のみちすじをたどってみると、児童の教育活動は児童の教育活動、学校経営は学校経営とそれぞれが独立した存在での機能を果たし、一体的でなくなにかばらばらの感を受けた。

本来、学校経営とは教育目標の実現をめざした教育のいとなみであって、そのねらいとする目的は同じである。そして学校経営の起点は、いつも児童を中心にすえたところから出発しなければならない。設定した教育目標を児童が授業という教育の実践活動をととして達成することができるように、それに必要な段取りを運営活動の中で設計の製図や青写真と同じようにつくっていくことなのである。だから、ねらいとする目的が同じで、仕事の起点となる対象が児童であれば、教育活動と運営活動との関係は一体にならなければならないということは当然のことなのである。

これら教育目標の設定から、教育活動と運営活動の仕事のすすめ方やその過程を1年間の時間の経過に合わせ図にあらわしてみるとP8の図2になる。

いま、一人の児童の入学から卒業までの期間を考えれば6か年である。この6か年で学校は意図した児童像にすべく教え導き、児童は学び育つのである。このことからいえば、小学校の教育目標の達成年限は6か年と考えるのが妥当といえよう。つぎの年度やそのつぎの年度に入学する児童については、世の推移と教育課題等をふまえながら、目標の見直しをおこない弾力的な手直しや移行措置等の手はずをととのえるべきであろう。ここには1年間分だけのものを取り出したが、図2と図1を合体したサイクルでくり返せば、目標実現のための学校経営は可能なはずといえよう。



各学期や年度の評価をおこない、つぎの学期やつぎの年度の計画をたてる

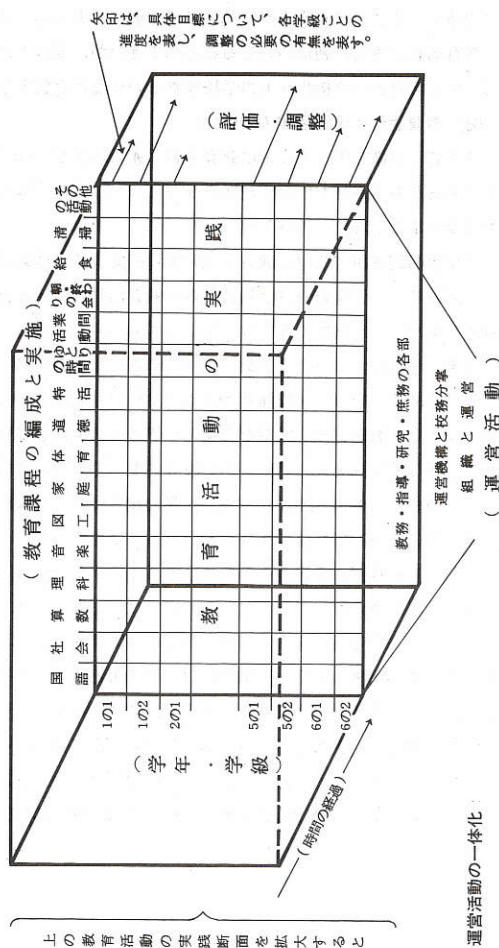


図2 教育活動と運営活動の一体化

2 学校の教育目標を具体化する過程

(1) 学校の教育目標の具体化についての基本的な考え

学校の教育目標は日常の教育活動を通じて実現していかなければならない。そのためには、6 年間の小学校教育の期間を通じて、児童の発達段階にそって具体化された目標を用意し、教育目標と教育活動とを結びつけていく必要がある。

学校の教育目標はいろいろな価値や願いをこめて設定するため、とすると、理念的・抽象的な表現にならざるをえないという一面を持っている。しかし、そのままであるならば、きわめて具体的・行動的である日々の教育活動とは関連のうすいものになってしまう。したがって、教育目標を教育活動に結びつけるには、理念的・抽象的な教育目標を一つ一つの教育活動に結びつくものに具体化していかなければならない。つまり、教育目標を具体的な行動のめあてとなる段階まで具体化することによって、はじめて実現可能な目標となってくるのである。

ここで、教育目標をどのように具体化すれば日常の教育活動に結びつけることができるのかについて、その基本的な考えを述べる。

ア 教育目標の学年・学級目標への具体化

学級は学校の教育目標の実現をめざし、日常的教育活動を展開していく単位集団である。それは、児童にとって教科等を学ぶ学習集団であるとともに、教師と児童及び児童相互の人間的なふれあいの生活集団でもある。しかも、学級担任がどんな学級の目標を掲げて教育活動を行っていくかによって、児童の人間としての成長発達にきわめて大きな影響を及ぼすことになる。それゆえに、児童の教育を担っている教師は、教育目標をより具体化して、児童の達成可能な行動のめあてとなるように学級目標を設定する必要がある。

イ 教育目標の教育課程への具体化

教育目標を実現する場合は、各教科・道徳・特別活動及び朝の会や給食・清掃・ゆとりの時間等、教師と児童のふれあうすべての時間である。これらの教育活動のどの断面をとりだしてみても、そこには教育目標の実現を指向する働きがなければならない。もし、毎日の授業の大半をしめる教科の指導に教育目標を具体化していかなければ、教育目標の実現はおぼつかないものとなる。

教育目標が日々の授業になかなか生きてこないのは、教育目標と教育課程との関連が十分でないところに大きな原因があると思われる。

そこで、この二つの関連をはかるために、教育目標にふくまれている価値や要素と、学習指導要領の教科の目標にふくまれている要素をつきあわせるという手法をとった。その結果、教育目標と教育課程において、双方がねらう価値や要素の間に、一致するものや関わりのあるものがあるということが明らかになった。そこで、双方のねらう価値や要素を手がかりとして、教科・領域等の目標へ教育目標をとけこませ、さらには、各学年の教科・領域等の目標へと具体化していけば、教育課程の1時間1時間の授業に教育目標が生かされていくものとする。

(2) 学校の教育目標の具体化

① 教育目標の具体化について

学校の教育目標は、学校がどのような教育をめざしていくのかを公にするものであり、教師にとってそれは共通の指標となるものである。教育目標の実現をめざして、すべての教師が共通理解と認識をもって日常の教育活動にあたるためには、より具体化した目標が用意されていなければならない。教育目標は望ましい児童像の形で表現されるため、理念的・抽象的になる一面を持っているので、日常の教育活動との間にはかなりの距離がでてくる。この距離をうめるための橋渡しとして、教育目標の意味内容を正確に把握し、あわせて、児童の実態等との関連をはかりながら、教育目標をより具体化したものにするのである。

このようにして表された目標は、P5にある教育目標実現の全体構造の図に示した具体目標のことである。具体目標とは、ここでは教育目標にふくまれている価値や要素を洗い出して、児童を意図した状態にまで高めようとすることがらを具体的なめあての形で表現したものであるとする。

P12には、学校の教育目標を具体化した九つの具体目標を表した。この具体目標は、一方では学年・学級目標の具体化へ、他方では教育課程の編成の面での具体化への基点となっていく。

② 具体目標と学年・学級目標について

学年・学級目標は、教師にとっては児童を意図した状態にまで高める姿が見えるものでなければならないし、児童にとっては、日々の教育活動のめあてとして到達できる見通しがはっきりわかるものでなければならない。

教師のはたらきかけによって児童が育っていくことを考えれば、単なる思いつきや自分勝手な教育観によって安易に設定することは許されない。設定にあたっては、教育目標にふくまれている価値や願いを正しく理解し、学年・学級の児童の発達段階や実態をみつめて反映させることが大切なことである。

学年目標は具体目標をそのよりどころとして、その学年の児童の活動に結びつくようさらに具体化したものである。設定にあたっては、P12表1の例をもとに述べると、9項目の具体目標に対応してさらに具体化し、児童の行動のめあての形で表現した。具体目標1項目について二つの学年目標となる場合もあるが、全体としては、各学年九つの目標を設定した。これらの学年目標は、すなわち、学校の教育目標を実現していく年次計画であり、6か年の小学校教育の期間を通じて教育活動を進めていく道しるべとなるものである。それゆえに、各学年の目標がどのように継続・発展していくのかという流れがはっきりわかるように系統だっていることにも配慮しなければならない。

学級目標は学年目標をうけてさらに具体化したものである。これは、学級の児童の発達段階や学習・生活の実態、あるいは、友人関係や家庭環境などの理解の上に立って設定していく。この学級目標は、日々の教育活動の中で、一人ひとりの児童の行動に結びつき、達成の見通しがはっきりもてるきわめて具体的なものである。このような考えをもとにして設定したのが、P12～13の学級目標である。

以上、教育目標の学年・学級への具体化について述べてきたが、その具体化にあたっては、教育目標→具体目標→学年目標→学級目標という順次性も考えられるが、上から下への一方通行だけでは、学年・学級の実態にそぐわなかったり、児童への一方的な押しつけとなったりして、十分な効果をあげられない場合もでてくる。また反対に、学年・学級の実態にのめり込んで目標を設定していくなら

ば、児童の日常活動が教育目標と結びつかないものになってしまう。したがって、教育目標を学年・学級目標に具体化するにあたっては、具体目標にふくまれている価値内容を学年・学級にくだいてみるとともに、学年・学級の持つ特性や児童の実態からしぼられてくることと調整をはかっていくことが必要である。

③ 具体目標と教育課程について

昨年度に実施した調査によれば、具体目標と各教科との関連についての質問に対して、70%をこす教師が、「学習指導要領に示された目標のほかに、具体目標を児童生徒の実態に合わせて組みこまなければならない。」と応えている。これは、具体目標と各教科の目標との関連をはかって指導にあたらなければならないという、教師の意識の高さを証明するものである。しかし、各学校の実情をみると、教育目標を各教科等へ結びつけている学校は非常に少ない。

そこで、学校における毎日の生活の大半をしめる授業の中に教育目標を具体化するため、教育目標にふくまれている価値や要素と、教科目標にふくまれている要素とをつきあわせてみた。その結果、双方のねらう価値や要素が一致するもの、あるいは、関わりのあるものがあることが明らかになり、それを糸口として教育目標を教育課程の編成に反映させる作業を進めた。そのようにして作成されたのがP14～15表2「教育目標と教育課程の目標」である。

以下、教育目標を教育課程の目標にどのようにとけこませて教育活動に反映させるか、表2をもとに、その手順について述べる。

ア 教育目標を実現する場合は、各教科・道徳・特別活動及び朝と終わりの会・給食・清掃・ゆとりの時間等であることから、たて軸には教育課程（教育活動）を、横軸には各学年を配列して分析した。

イ 教育目標にふくまれている価値や要素と、学習指導要領にある教科の目標にふくまれている内容とをつきあわせ、双方がねらう価値や要素との間に一致するものや関わりのあるものを「具体目標との関連要素」として表した。

ウ イであげた「具体目標との関連要素」を教科・領域等の目標にとけこませ、それを整理して教科・領域等の目標の一つとしてあげた。

エ ウと同じ手法で教科・領域等の各学年の目標を設定した。

オ エで設定した各学年の教科・領域等の目標の達成をみるには、その意図がそれぞれの題材や単元に生きてこなければならない。算数科についてそれを試みたのが表3の「教育目標と第2学年算数科の目標」である。

表1 教育目標と具体目標・学年目標・学級目標

教 育 目 標			第 1 学 年	第 2 学 年
教育目標	具 体 目 標	主 な 要 素		
確かな読みと 考えを深める子 ども	読みとる力をつける子	基礎的な力 文字を書く力 計算の力 継続力、読書力	○漢字の筆順と計算を正しく できる子ども	○漢字とかけ算を正確にできる 子ども
	自分の考えを発表できる子	自主性 表現力 作文力、発表力	○ともだちと何でも話し合う子 ども	○できごとや思ったことを作文 にしたり、大きな声で発表す る子ども
	すじみちをたてて考える子	論理的思考 多面的思考 創造的思考	○自分のしたことや思ったこと をすなおに話す子ども	○自分のしたことや思ったこと を時間の経過にそって話をす る子ども
最後まで走りぬいて 心と体をきたえる子ども	すすんで運動をする子	体位、体力 積極性 主体性	○ともだちとなかよく遊ぶ子ど も	○力いっぱい外遊びをする子ど も
	最後まで走りぬく子	忍耐力 持続力	○毎日グラウンドを2回以上走り ぬく子ども	○なわとびや鉄棒などをまちが っても何回もやりなおす子ど も ○毎日グラウンドを3回以上走り ぬく子ども
	健康に気をつける子	健康 安全 生命	○すききらいをせずなんでも食 べる子ども ○交通安全のきまりを知り、そ れを守る子ども	○汗のしまつをするなど基本 的な生活習慣の身につけてい る子ども
力をあわせて みんなのために働く子ども	なかよく仕事をする子	協力 勤労 奉仕	○上級生に教えてもらいながら がんばってそうじをする子ど も	○そうじのしかたがわかり力を あわせてそうじをする子ど も
	他人に迷惑をかけない子	規則、自律 責任、思いやり 公共心、整理整頓	○自分の持ち物のせいりせいと んのしっかりできる子ども	○自分の物もみんなの物も大切 にあつかう子ども
	美しい心をもつ子	美的情操 動植物の愛護 礼儀	○先生やともだちにさわやかな あいさつができる子ども	○しっかりあいさつをするなど 礼儀正しい子ども
○年A組の 学 級 目 標			○上級生に教えてもらいながら がんばってそうじをする子ど も ○道路を歩くときの約束をまも りながら、けがをしない子ども ○ともだちと何でも話し合える 子ども	○そうじのしかたがわかり、力 を合わせてそうじをする子ど も ○大きな声で発表する子ども ○なわとびや鉄棒遊びをがんば る子ども

第 3 学 年	第 4 学 年	第 5 学 年	第 6 学 年
○漢字・計算の練習をすすん でやる子ども	○送りがな・四則計算を正しく できる子ども	○漢字・計算を自ら計画をたて て練習する子ども	○漢字・計算を自ら計画をたて て練習する子ども ○自分で読書計画をたてて実行 する子ども
○人の話をしっかり聞き、自 分の意見もはすかしがらず に発表する子ども	○人の話をメモをとりながら聞 き、そのあらましを発表する 子ども	○人の意見を自分の考えと比べ ながら聞き、そのちがいを発 表する子ども	○考えていることを順序だてて みんなにわかりやすく発表し たり作文したりする子ども
○自分の考えたことをわけを つけて話したり、文にしたり する子ども	○考えたことを理由をつけなが ら順序だてて説明したり、ま とめてかんたんに話したりす る子ども	○友だちの考えに感動したり、 さらに別の考え方をみつけた りする子ども	○どう考えて問題をとけばよい のか、最後まで考えぬく子ど も
○運動に必要な約束をつくり ながら運動をする子ども	○なわとびや鉄棒などの運動種 目に目あてをきめてがんばる 子ども	○進んで運動に参加し、目あて をもって体をきたえる子ども	○自分の体力を知り、目あてを もって体力づくりにはげむ子 ども
○毎日グラウンドを5回以上走 りぬく子ども	○にがてな運動にもやる気をだ してがんばる子ども ○800mの持久走を最後まで 走りぬく子ども	○1000mの持久走を最後まで で全力をだしきって走りぬく 子ども	○進んでグラウンドを走り、下級 生のリーダーとなる子ども
○自転車の乗り方のきまりを 知り、それを守る子ども	○生活にきまりが必要なわけが わかり、きまりを大切にす る子ども	○生活のきまりを守り、けじめ のある生活をする子ども	○自他の健康安全に気を配り、 病気や事故のない生活をする 子ども
○力をあわせていっしょうけ んめいにそうじをする子ど も	○使用した用具のあとしまつを するとともに、教室の美化に つとめる子ども	○上級生としての自覚にたっ て、進んで校内外の美化につと める子ども	○学校内外の美化に関心をもち 計画的に美化につとめる子ど も
○時刻を守り、きびきびした 行動のとれる子ども	○集団の中の一人としての自覚 にたって、みんなと一緒に行 動する子ども	○どのような行動がわがまな 行動かを反省し、それを直そ うと努力する子ども	○相手の立場にたって考える、 思いやりのある子ども
○生き物をよるこんで世話す る子ども	○いきものの成長に気づき、思 いやりの心をもって世話をす る子ども	○時と場所にふさわしい言動を する子ども	○まわりの人びとの気持ちがわ かる子ども
○力をあわせていっしょうけ んめいそうじをする子ども ○計算・漢字ドリルのテスト で百点をとる子ども ○考えたことを勇気をだして 発表する子ども ○毎日グラウンドを5回以上走 る子ども	○使用した用具や場所のあとし まつをするともに、教室の 美化につとめる子ども ○漢字と四則計算が正しくでき る子ども ○みんなと一緒に行動できる子 ども	○上級生としての自覚にたっ てすすんで美化につとめる子ど も ○友だちの考えや行いのよさを みつけられる子ども ○時と場所にふさわしい行いを する子ども ○目あてをもって体をきたえる 子ども	○学校の内外の美化に関心をもち、計画的に美化につとめる 子ども ○わかるまで考えぬく子ども ○すすんでグラウンドを走り、下 級生のリーダーとなる子ども

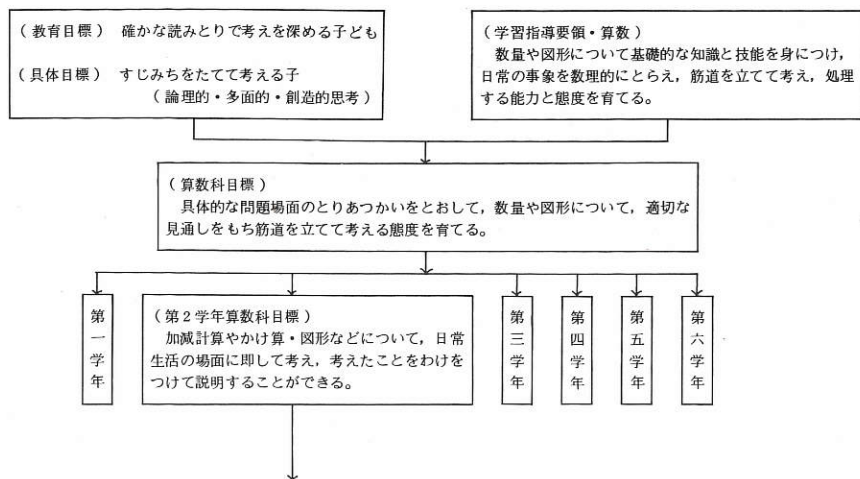
表2 教育目標と教育課程の目標（教科領域等の目標のうち、教育目標と関連を図った部分を掲出）

	目 標	具体目標との関連要素	第 1 学 年	第 2 学 年
国 語	進んで本を読み、文章を正しく読みとることができる。	◎読解力 表現力 論理的思考 美的情操 創造力 基礎的な力 話し方・聞き方	大きな声とはっきりした発音で平仮名と片仮名の文章を読むことができ、大まかな筋路をつかむことができる。	文章ののべていることについて、時間的な順序・場面の移り変わり・事柄の順序・人物の性格などを考えながら読むことができる。
社 会	地図や図表に示されている内容を正しく読みとることができる。	◎読解力 基礎的な力 資料の読みとり	自分たちの生活を支えている人々の仕事や施設のはたらきを具体的な観察をとおして読みとることができる。	小売店や農業・工場などではたらく人々の仕事を観察をとおしてわかり、そのようすを絵や表などに表現することができる。
算 数	具体的な問題場面のとりあつかいをおして、適切な見通しをもち筋道をたてて考えることができる。	◎論理的思考 多面的思考 基礎的な力 表現力 主体性	初歩的な加減計算や図形について、日常生活の具体的な経験をとおして考え、考えたことを順序だてて説明することができる。	加減計算やかけ算・図形について、日常生活の場面に即して考え、考えたことをわけをつけて説明することができる。
理 科	自然に接する機会を多くして、想像を豊かにし、いろいろな角度から考えたり新しい考えをみつけたりすることができる。	◎多面的思考 ◎創造的思考 論理的思考 自然愛護 動植物の愛護	身近にある生物や自然の事象に具体的に接し、行動をとおして観察したことをそのままいうことができる。	行動をとおして観察力を高め、見たこと、感じたこと、思ったことなどをことばでわかりやすくいうことができる。
音 楽	歌うことをとおして音楽の美しさを感じとり、生活を楽しいものにすることができる。	◎美的情操 ◎表現力	互いの歌声を聴きあって、生き生きと歌うことができる。	
図 画 工 作	粘土に親しみ、立体表現の喜びを味わうとともに、その美しさを追求することができる。	◎美的情操 ◎表現力	自然の粘土に親しみ、手をじゅうぶんはたらかせ思いきり表現することができる。	
家 庭	実践活動をおして、家庭生活のあるべき姿を理解し、健康な生活を送ることができる。	◎健康 思いやり		
体 育	進んで運動に親しみ、最後まで走りぬいてじょうぶな体をつくるようにする。	◎忍耐力 ◎持続力 体位体力 積極性	だれとでもなかよくいろいろな運動をし、最後まで走りぬいてじょうぶな体をつくることができる。	
道 徳	自分の行動に責任をもち、みだりに他人に動かされない心を持つようにする。	◎責任 ◎自律 規則	自分の考えをはっきりもってのびのびと行動し、自分のことは自分でできる。	
活 動 別 の 終 明 の 会 の 会	他人の立場に立って物事を考え進んで実践するようにする。	◎実践力 協力 思いやり 自主性	みんなできまりを守り、なかよく学校生活を送ることができる。	
給 食	自分の考えたことをどうとんと発表することができる。	◎発表力 表現力	自分の経験したことを大きな声で発表することができる。	
清 掃	食事作法を身につけ、楽しい食事ができる。	◎食事作法 健康	すききらいをせず、なんでも食べることができる。	
時 計 と り 関 の	力をあわせてなかよくそうじをすることができる。	◎勤労 協力 公共心	そうじのしかたを上級生に教えてもらいながら、時間内に終わることができる。	
	植物を育てたり動物を飼ったりして、動植物への親しみをもち、よろこんで草とりなどをすることができる。	◎動植物愛護 勤労奉仕 美的情操 思いやり 自然愛護	学級の花だんのせわをとおして、植物への親しみをもち、よろこんで草とりなどをすることができる。	

◎ 印 関連の大きい要素

第 3 学 年	第 4 学 年	第 5 学 年	第 6 学 年
文章や話の要点を正しく理解し、それらの内容を自分の立場からまとめ、聞き手にわかるように話してきかせることができる。	読めない文字・意味の不明な箇所について辞書を用いて調べることができ、初歩的な主語と述語を中心とした文の構成もできる。	文の主題や要旨を確実に理解し、自分の感想や意見をまとめ、文の組立・語句の使い方に気を配りながら、的確に文章を構成することができる。	文章を読んで書き手のものの見方・考え方・感じ方と自分の考えと比べることができ、文章の描写や叙述のすぐれた箇所を味わい、読むことができる。
社会的事象を具体的に観察してそのようすを地図やグラフに表したり、資料として地図や図表を使って地域社会のことを読みとることができる。	地図もけいづくりをとおして地図のきまりを理解し、いろいろなことに地図帳を資料として使うことができる。	目的に応じて地図帳や資料を使うことができるようになる。また、社会的事象について、それにあった資料をつくることできる。	国の歴史や国際社会における日本国の役割などについて、いろいろな資料から読みとることができる。
小数・分数の意味や乗除計算の理解、重さなどについて順序だてて考えることができる。	小数の乗除計算における小数点の正しい処理の仕方や面積の意味理解などにおいて順序だてて考えることができる。	基本図形の求積や式の表す数量関係、異分母分数の計算などすじみちをたてて考えることができる。	整数・小数・分数の関係や比例などの関数的な見方、図形の相互関係などをすじみちをたてて考えることができる。
発想力を高め、いままでの経験をもとにしていろいろな観点から考え、それにそって実験をすることができる。	事実をもとに筋道をたてて考えることも、抽象的思考もだんだんできる。また、友だちの考えもとり入れて考えることができる。	直観的な自由な発想を大事にするとともに、抽象的思考もだんだんできる。また、友だちの考えもとり入れて考えることができる。	自然の事象の変化などについてこうだからこうなるのではないかと仮説をたて、それを実験によって確かめてみるることができる。
音の重なりのおもしろさを感じとって、生き生きとたのしく合唱することができる。		和声の美しさを感じとり、生き生きと合唱ができる。	
粘土で表すのに適した扱いやすい用具を使うなどの工夫をし、つくるものの感じができるように表すことができる。		粘土で表すのに適した用具を工夫して使い、立体表現の美しさを追求することができる。	
		衣食住などの実践的な活動をおして、家庭における自分の立場や役割を自覚し、健康な生活を送ることができる。	
にがてな運動にも進んで練習し、最後まで走りぬいて体力をつけることができる。		自分の体力にあった目あてを持ち、最後まで走りぬいて体力づくりにはげむことができる。	
よく考えて正しいと信ずるところにしたがって、責任ある行動をとることができる。		自由と責任との関連をよく考え、みだりに他人の意見や行動に動かされないようにすることができる。	
楽しい学校生活を送るための約束をみんなできめたり、学級の問題は自分たちで解決したりすることができる。		高学年としての自覚にたち、協力してよりよい学校生活を送れるよう自ら進んで行動する。	
いろいろなできごとや考えたことをみんながわかるようにまとめて発表することができる。		友だちの発表をきいて感動したことをわかりやすくみんなに発表することができる。	
給食における食事作法を身につけ、楽しい食事をすることができる。		時と場所に応じた食事作法を身につけ、楽しい食事をすることができる。	
みんなと協力分担しあって、てきぱきと仕事を進めることができる。		下級生の模範として、じょうずなそうじのし方を身につけ、進んで仕事をすることができる。	
小鳥やウサギのせわをとおして、動物への親しみをもち、よろこんでいろいろな仕事を積極的にすることができる。		実習田での勤労体験学習をおして、いねの成長に気づいたり、汗を流してはたらいたりすることの尊さを体得する。	

表3 教育目標と第2学年算数科目標



月	単 元	時数	単 元 目 標
4	1. せいのりのかた	5	○簡単なことがらを整理して、表やグラフの形に表したり、それを読んだりすることができる。 ○身近にある資料をもとに、分類整理するには、観点をきめるとよいことを知り、その整理のかたについて順序立ててまとめることができる。
	2. たし算(1)	6	○2位数と2位数の加法で、繰り上がりのある場合の計算のしかたを、計算棒などの操作をとおして理解し、その計算が確実にできる。 ○計算のしかたを順序だててわかるように説明することができる。
5	3. ひき算(1)	10	○2位数と2位数の減法で、繰り下がりのある場合の計算のしかたを理解し、その計算が確実にできる。計算のしかたも順序だてて説明することができる。
	4. か さ	4	○かさについて、単位(dl・l)を知り、dlますやlますをつかって容量をはかることをとおして測定の意味を知り、これを用いることができる。
6	5. 1000までの数	12	○たくさんものを数えるには、10ずつ、100ずつの集まりをつくって、それぞれの集まりがいくつあるかを数えればよいことに気づき、手ざわよく操作することができる。 ○1000までの数の数え方・読み方・書き方をとおして、十進位取り記数法や命数法による数の表し方がわかる。
	6. 三角形と四角形(1)	4	○三角形・四角形を構成する要素(辺・頂点)を知り、それに着目して図形を弁別したり、図形をつくらしたりすることができる。
7	7. 長 さ(1)	3	○かさははかる既習経験をもとに、ものの長さを表す単位(cm)の必要性がわかり、ものさしのしくみを知って正しく測定することができる。

月	単 元	時数	単 元 目 標
7	8. たし算とひき算(1)	4	○かんたんな場合の加減法の問題について、数量の関係をテープ図に表しとくことができ、テープ図をもとにして自分の考えたことを説明することができる。 ○日常生活を想起しながら、具体物を操作したり絵に表してみたりして、どんな式になるのかをすじみちたてて考えることができる。
8	9. たし算(2)	6	○3位数までの加法で、くり上がりの2回ある場合の計算ができる。 ○けた数の多い数の計算でも既習と同じ考えにたって処理することができることに気づき、筆算のしかたを順序だてて説明することができる。
9	10. ひき算(2)	6	○3位数までの減法で、既習の経験を生かしながら、くり下がりが2回ある場合の筆算のしかたを説明することができ、正しく計算ができる。
10	11. 三角形と四角形(2)	7	○かどの形や辺の長さなどに着目して、正方形や長方形・直角三角形をかいたりまたは色板をしきつめたりすることができる。
	12. たし算とひき算(2)	5	○加減混合の計算はまえから順序よく計算すればよいことを具体的な場面に即して考えることができる。また、正確に3口の計算ができる。
11	13. かけ算(1)	10	○量や数についての倍概念の考えがわかり、5のだんと2のだんの九九をつくって正しくとなえることができる。
	14. かけ算(2)	10	○既習の5のだん・2のだんの九九の構成をもとに、3のだん・4のだん・6のだん・7のだんの九九の構成をすることができる。 ○具体的な場面に即して、かけ算が用いられる場を知り3のだん・4のだん・6のだん・7のだんの九九をとなえることができる。
12	15. かけ算(3)	10	○8のだん・9のだん・4のだんの九九をつくり、正しくとなえることができる。 ○具体的なことがらに即して、かけ算が用いられる場をわけをつけて説明することができ、$a \times b$にあった問題をつくることができる。
1	16. お正月	10	○加法や減法・乗法の問題をとくにテープ図を手がかりとして考えることができる。その考えをすじみちたてて説明することができる。
	17. 長 さ(2)	4	○長さの単位(cm・mm・m)のしくみがわかり、はかる対象によって測定用具をえらんだり正しくはかったりすることができる。
2	18. 10000までの数	10	○10000までの数で学習したことを想起し、具体物を操作しなくても数を読んだり、数の大小・順序についてすじみちたてて考えることができる。 ○4位数までの加減法も、既習の筆算形式をもとにして正しく計算することができる。
	19. はこ形	4	○立方体や直方体の面の数や辺・頂点の数・辺の長さなど具体物をもとに理解することができる。

(3) 運営目標の具体化

① 学校の教育目標の実現をめざす運営目標の具体化

学校運営は、教育活動を支える条件整備等も含めて、教育目標を実現するための主として教師側の営みである。だから、学校の運営方針や運営目標について、具体的な方策のレベルまで明確にしておくことが必要となってくる。それが、学年・学級や各部・各係等の運営組織のそれぞれの部門における、それぞれのねらいや経営計画（年間活動計画）の上に生かされて、教育活動が営まれるという姿になるはずである。

ところが、県下の実態をみると、教育目標の具体化と運営目標とが混在してしまったり、教育目標と運営目標、及び運営目標と運営組織面での各部門の目標・計画との間の関連性が希薄である場合が多い。そのために、教育活動が教育目標の実現をめざして行われる、ということに結びつかないところが多くみられる。

これらのことについて工夫してみたのが、P18～19の表4及び表5である。（ここにのせた例には、教育目標からきた運営目標を、それぞれの経営計画の中にどう反映させているか、という部分のみを掲げた。）

表4 教育目標を運営目標に具体化した例

教育目標	運営方針	運営目標	具体的方策
確かな読みと書きを深め、子ども	読みとりの力をつける子	基礎学力の充実をはかる 読書指導に力を入れる	国語・算数の力をつける 学校図書館を充実する 教科の基礎・基本の洗い出しをする（国語・算数） 国語・算数の授業研究を通して指導法を改善する 漢字・計算の進捗テストを実施する 児童図書を整備・読書時間の設定をする
	自分の考えを表現できる子	発表力を育てる	作文の指導を重視する 全校集会で全児童1回以上作文や意見を発表させる 授業での話し合い活動を大切にする
	すじみちをたてて考える子	論理的な考え方を育てる	すじ道のとった考え方ができるように指導する 重点研究で国語（説明文の読解指導）、及び算数をとりあげる
心と後体をきたえ、子ども	すすんで運動をする子	運動の好きな子を育てる 体力の向上をはかる	グラウンドを整備（トラックに埋込み白線等）する 運動用具を整備（鉄棒の増設、サッカーゴールの補修、体育館の登り綱等）する
	最後まで走りぬく子	がんばりぬく気力を育てる	中間休み、放課後等に「日本一周マラソン」を継続して実施する マラソンコースを設定する
	健康に気を配る子	健康安全に気を配る子を育てる	自分の健康と安全に関心をもち生活するように指導する 毎月体重測定をする・手洗いの習慣づくりをする 薄着の励行をさせる・授業中の姿勢に注意する 交通安全教室を実施する・安全点検を強化する
力を合のわために働く子ども	なかよく仕事をする子	協力・奉仕・責任の心を大切にする	協力して働くことの大切さをわからせる ボランティア活動を実施する JRC活動を強化する
	他人に迷惑をかけない子	他人の立場にたつて物事を考えられる心を育てる	朝会で職員による訓話をする 児童会活動を活かさせる 緑のポスト（善行箱）を設置する
	美しい心をもつ子	美しいものに感動しそれを大切にできる心を育てる	全校集会で、全校合唱をさせる 児童に自分の愛唱歌を持たせる 学級花壇の世話をする 一人一鉢栽培をさせる

表5 運営目標を受けて立案される組織部門の経営計画の例

1 図書館教育経営

- 経営目標
 - 児童の図書利用の実態や蔵書の実態をもとにして、学年に応じた児童図書の整備充実をはかるとともに、図書利用のしかたや読書のしかたの指導を充実させる。
- 経営の重点
 - (1) 図書利用の実態調査 (2) 学年に応じた児童図書の充実
 - (3) 読書計画と読書指導 (4) 読書感想文募集への応募
- 経営及び指導
 - (1) 図書資料の充実（略）
 - (2) 利用指導（国語、学級指導の各計画に基づいて行う）（略）
 - (3) 具体的運営
 - 館内閲覧・館外貸出し・広報活動・移動文庫（1年）（略）
 - (4) 読書指導
 - 集団読書・自由読書・読書感想文・読書ノート・読書不振児
 - (5) 学年における指導
 - 低学年（本を楽しく読む）・入門期における指導（読みかせなど）・巡回文庫の活用・見る本・読む本・読書記録・読書感想文・読書感想画・読書発表会
 - 中学年（読書量を伸ばす）・各種の本を読む・事典年鑑の利用・読書発表会・読書感想文
 - 高学年（読書の質・量の広がりや深まりを求める）・文学作品に目を向ける・作者に関心をもち・読書感想文
 - (6) その他
 - 図書利用調査・標語作り・読書ノート展等
- 年間計画

月	努力点	活動内容
4月	図書利用のしくみを覚え、たくさん読む計画をたてよう	環境整備をする・標語を作る 年間計画を作成する 図書を購入する 2年生の図書利用の指導をする
6月	課題図書、推せん図書、たくさん読む、科学的な読みものを、たくさん読む	新刊図書の紹介をする 課題図書の紹介をする 読書ノートの指導をする 読書冊数のまとめをする 夏休み中の貸出しをする 図書整理と環境整備をする
9月	すすんで感想文や、感想画を書こう	感想文や感想画を募集する 図書を購入する 読書週間を設ける 読書ノートの指導をする 図書修理をする
11月	いろいろな本を、たくさん読む	読書感想文の発表会をする 標語を作る
12月	課題図書、推せん図書をもう一度読もう	正月休み中の貸出しをする 図書整理をする
1月	いろいろな本を読もう（低）	読書冊数のまとめをする 図書修理をする
2月	読んだ感想を発表しよう（高）	
3月	読書生活を反省しよう	年間の活動を反省する 図書整理をする

2 第3学年3組学級経営案

学級目標	- 考えたことを勇気をだして発表する子ども - 計算・漢字ドリルのテストで百点をとる子ども - 力を合わせていっしょけんめいにそうじをする子ども - 毎日グラウンドを5回以上走る子ども
学級の現状	- 在籍 男19名、女18名、計37名 - 学習一般（略） - 生活（略） - 身体（略） - 特記事項・知能・行動・身体（略）
経営の重点	- 人の話をしっかり聞く・はずかしがらずに意見を発表する - 目標をもってドリルや朝読みにとりくむ - 長所を認め合い、きまりを守って、安全に行動する - 毎日グラウンドを5周以上しながら、県内一周にいく
経営計画	- 学習指導（略） - 生徒指導（略） - 健康指導 - 毎月の体重測定の結果をグラフ化して、健康に留意する - 走った距離を、毎週個人ごと、班ごとに集計する - 計画をたてていろいろな運動にとり組ませる（他略） - 情操指導 - 全校合唱曲や学級の歌を歌う場を設け、楽しく歌うようにする - 小鳥、花壇、へちまの世話を責任をもってやらせる - 小さな親切を数多く行えるようにする（他略） - その他 - 家庭でのめあての具体化 - その他

② 教育目標の実現をめざす運営組織

運営目標を達成するための具体的方策をたてたとしても、それを直接担当する組織がなければ、学校の教育目標の実現はおぼつかない。したがって、具体的方策が実行されるには、どのような運営機構にしなければならないかという観点にたつて運営機構の検討が必要となる。P20の表6は、具体的方策と運営機構の各部門との関係を示した例である。（1部分のみを示す）このようにしてみると、それぞれの具体的方策がどの部門で担当して実行に当たるかが明らかとなる。

つぎに、運営機構の各部門に担当者が配置される。各担当者は、学校の教育目標を実現するために、自分の担っている役割を十分自覚したうえで、運営目標の達成をめざして分担している部門の計画をたてて実践に移していくことになる。運営組織のそれぞれの部門で、このような働きがなされる時、それが総合されて学校全体として教育目標実現のための教育活動を支える運営活動がなされることになる。

表6 運営目標の具体的方策と運営機構の関連の例

運営目標	具体的方策	運営機構							
		教務部	指導部	図書部	保健・安全	体育指導	重点研究	各教科	特別活動
○国語・算数の力をつける	・教科の基礎・基本の洗い出しをする(国語・算数)		◎					◎	◎
	・国語・算数の授業研究を通して指導法を改善する							◎	
○学校図書館を充実する	・漢字・計算の進級テストを実施する							◎	
	・児童図書の整備・読書時間の設定をする	◎		◎					◎
○自分の考えをまとめて、文に書いたり話をしたりできるようにする	・作文の指導を重視する			◎				◎	
	・全校集会で全児童年1回以上作文や意見を発表させる		◎						◎
	・授業での話し合い活動を大切にする		◎	◎				◎	◎
○すじ道のとった考え方ができるように指導する	・重点研究で、国語(説明文の読解指導)及び算数を取りあげる		◎					◎	◎
○いろいろな運動ができるようにする	・グラウンドを整備(トラックに白線の埋込み等)する					◎			
	・運動用具を整備(鉄棒の増設、サッカーゴールの補修、体育館の登り綱等)する					◎			
○一人ひとりに得意な運動をもたせる	・中間休み、放課後等に「日本一周マラソン」を継続して実施する	◎				◎			
	・マラソンコースを設定する					◎			
○自分の健康と安全に関心を持って生活をするように指導する	・毎月体重測定をする・手洗いの習慣づくりをする	◎				◎			
	・薄着の励行をさせる・授業中の姿勢に注意させる					◎			
	・交通教室を実施する・安全点検を強化する	◎				◎			◎

③ PTAや地域社会からの理解と協力

学校の教育目標を実現するためには、PTAや地域の関係各団体から、それについて理解と協力を得ることも大切である。そのためには、学校の教育目標から具体化された運営目標の具体的方策に対応するものとして、家庭や地域社会での具体的なめあてとなるものがあつた方が効果的であろう。そのめあてのたて方や示し方はいろいろあろうが、その一例がP21の表7である。

PTAや地域社会から理解してもらい、協力してもらう必要のある理由として、つぎのことが上げられる。①地域社会に開かれた学校として、地域の課題が学校の教育目標に含まれており、その実現をはかるには地域の協力が必要であること。②児童の生活時間は、学校にいる時間よりも、家庭や地域社会にいる時間の方がはるかに長い。したがって学校と家庭や地域社会が、同じ方針で同じ歩調で教育目標の実現にとりくむ必要があること。③児童の成長には家庭や地域社会の果す役割が非常に大きいこと。

また、PTAや地域社会から協力を得るためには、学校から家庭や地域社会への積極的な働きかけが必要である。その方法は、いろいろ工夫されなければならないが、つぎのようなことも考えられる。

①家庭や地域社会の人々から理解や協力を得たいことが、つねにその人々の目にふれるように、内容をみやすく、わかりやすく工夫して印刷され、それが家庭や公共施設に掲示されること。②学校における

各種の会合で、学校の教育目標と学校でのその実現への取組みについて、また家庭でどういことをやっていけばよいかについて必ず話し合いをもつこと。③学校として、地域社会の諸会合に出席して、学校の教育目標の実現への取組みについて話をして協力方を求めること。④学期ごとに、家庭からの反省(評価)を求めること。

表7 運営目標の具体的方策と家庭のめあてとの関連の例

運営目標	具体的方策	家庭のめあて
○国語・算数の力をつける	・教科の基礎・基本の洗い出しをする(国語・算数)	・学習の時間、手伝いの時間、テレビ視聴の時間等を適切に保ち、生活リズムを習慣化させる
	・国語・算数の授業研究を通して指導法を改善する	・親子読書の時間をとる
○学校図書館を充実する	・漢字・計算の進級テストを実施する	・日記をつけさせる
	・児童図書の整備・読書時間の設定をする	・毎日大きな声で朝読みをさせる
○自分の考えをまとめて、文に書いたり話したりできるように指導する	・作文の指導を重視する	
	・全校集会で全児童年1回以上作文や意見を発表する	
○すじ道のとった考え方ができるように指導する	・授業での話し合い活動を大切にする	
	・重点研究で国語(説明文の読解指導)及び算数を取りあげる	
○いろいろな運動ができるようにする	・グラウンドを整備(トラックに白線の埋込み等)する	・洗顔、歯みがき、手洗いなど保健衛生上の良い習慣をつけさせる
	・運動用具を整備(鉄棒の増設、サッカーゴールの補修、体育館の登り綱等)する	・交通安全のルールをみんなで守らせる
○一人ひとりに得意な運動をもたせる		・地域内の安全点検をする(毎月)
		・薄着の励行、下着のとりかえに留意させる
○目標をたてさせて走りぬかせる	・中間休み、放課後等に「日本一周マラソン」を継続して実施する	
	・マラソンコースを設定する	
○自分の健康と安全に関心をもって生活をするように指導する	・毎月体重測定をする	
	・手洗いの習慣づくりをする	
○協力して働くことの大切さをわからせる	・薄着の励行をさせる	
	・授業中の姿勢に注意する	
○ボランティア活動をさせる	・交通教室を実施する	
	・安全点検を強化する	
○おもいやりの心の大切さをわからせる	・実習田を設け勤労体験学習をさせる	・自分のことは自分でさせる
	・5・6年にキャンプを実施する	・最後まであきらめないでやりとおさせる
○歌うことの好きな子どもにする	・たて割清掃を実施する	・小さい子の面倒をみるようにさせる
	・JRC活動を強化する	・金銭、物品を大切にさせる
	・朝会で職員による訓話をする	・忘れものがないようにさせる
	・児童会活動を活発にさせる	・家の仕事を分担させる
	・緑のポスト(善行箱)を設置する	・すすんで手伝うようにさせる
		・公共物を大切にするようにさせる
	・全校集会で、全校合唱をさせる	・親子合唱をする
	・児童に自分の愛唱歌をもたせる	・家庭に子どもの花壇をつくって世話をさせる
	・学級花壇の世話をする	
	・一人一鉢栽培をさせる	

(注 表6・表7については、それぞれ全体の中の一部を例として掲載した)

3 学校の教育目標を実現する過程

(1) 学校の教育目標の実現化

学校経営の中核的なことは、設定した学校の教育目標に即して、教育課程を編成し、児童のうに目標の実現をはかっていくことである。

前項では、学校の教育目標を、各学年の児童の実態にあわせ、系統性や発展性にも留意しながら、学年・学級目標に具体化し、一方では、各教科・道徳・特別活動等の目標にまで具体化する手法を明らかにしてきた。これらを、それぞれの指導計画に生かし、組織的、計画的に達成していかねばならないわけである。

昨年度の当教育センターの調査結果によると、学校の教育目標が細分化され具体化されても、日々の教育活動、とりわけ、各教科の指導にまで浸透していかないことが指摘されていた。

これは、学校の教育活動の計画と実施の過程で、具体目標の実現をめざして、どのような教育活動をおこなっていくかという吟味が、必ずしも十分なされていないためと考えられる。

この項では、教科・道徳・特別活動の指導を中心に、学校の教育目標を、どのようにして実現していくか、実践例を上げながら考察していくこととする。

① 教育目標の実現をはかる主な場のおさえ

教育目標は、学校におけるすべての教育活動をととして実現されなければならないのは前述のとおりである。だが、このことは、どの目標も全部の教育活動にかかわって、まんべんなく実現されていくということではない。目標によっては、主として、教科の指導にかかわって、また、道徳や特別活動の指導にかかわって、さらには、校内外の常時活動の指導にかかわって実現を図っていくというものもある。

教育のいとなみは、目の前にいる児童を、どう育てどう導くかという具体的ないとなみである。そうであれば、何のために、誰が、いつ、どこで、どのようにして指導にあたるのかを明確にしておくことが大切となってくる。

学校の教育計画作成にあたっては、設定した教育目標の実現を図る場、すなわち、目標達成にもっとも近い指導内容や活動の用意されている教科や領域を洗い出し、それと教育目標との関連を意図的に強めていくことが考えられる。そこで、両者の関連を下表のようにおさえてみた。

表8 教育目標の実現をはかる主な場（◎は特に関連の強いことを示す）

具 体 目 標	具 体 目 標 の 実 現 を は か る ま じ な 場									
	教 科	道 徳	特 別 活 動	ゆ づ り の 時 間	常 時 活 動	給 食	清 掃	朝 の 会	終 わ り の 会	校 外 活 動
読みとりの力をつける子	◎		○							
自分の考えを発表できる子	◎	○	◎	◎				○	○	
すじみちをたてて考える子	◎		◎							
すすんで運動をする子	◎		○	○	◎					○
最後まで走りぬく子	○	○	○	○	◎			○		○
健康に気をくばる子	◎		○		◎	◎	○	○		○
なかよく仕事をする子	◎	◎	◎	◎			◎		○	○
他人に迷惑をかけない子	○	◎	◎				○	○		○
美しい心をもつ子	○	◎	○	◎						○

② 教育目標の実現を図る授業

ア 教科の指導をととして実現を図る

教育目標の実現は、学校の全教育活動をととしてなされることになるが、なかでも教科指導の占める役割は大きい。それは、教科指導が、学校教育の中心的位置を占め、教育目標の実現をめざして行われる授業の時間の大部分を占めることからいっても当然といえよう。

ところが、当教育センターの昨年度の調査結果によると、教育目標と教科の年間指導計画との関連を十分図っているとする学校は25.5%と低い率であった。これは、教育目標は、全人的で態度形成的な目標であり、教科指導とは関連が薄いという考え方が一般的であるためと、教科の指導計画が学習指導要領や教科書等をそのまま受け入れて作成され、教科の指導をととして、学校の教育目標の実現を図っていくことの重要性にまで目が届かなかったためとも考えられる。

教育目標が、学校の全教育活動をととして、児童を意図したレベルに高めるものである以上、毎日の学校生活の大半を占める教科指導の中に、緊密に浸透していなければならないのは当然である。そこで、教科の指導のなかで、教育目標の実現をどのようにして図っていくかという視点から次に述べることとする。

(ア) 教育目標と教科指導の関連

a 教育目標は、その学校での、学力についての考え方の方向づけをする。

教科指導の中心的なねらいは、学力の形成である。学習指導要領には、各教科の目標及び指導内容が明示されている。しかし、それは全国の学校教育の標準とするねらいであって、そこからその学校でねらう統一的な学力についての考え方が生まれてくるとは限らない。学校の児童の実態をふまえて、授業を充実させていくには、1日1日の教科指導を方向づけるその学校としての考え方が必要となる。その基となるのが、教育目標、とくに「知」に関わる教育目標である。

例えば、「確かな読みとりで考えを深める子ども」でねらう学力は、断片的で皮相浅薄な知識のよせあつめではなく、深い洞察力和実践力をともなった質の高いものを目指しているのである。

b 教科の目標の重点化の方向づけをする。

本校の学力についての考えにそって、児童に力をつけていくには、教科の目標のどれに重点を置いて扱っていけばよいのか。その方向づけをするのが学校の教育目標である。

c 教科の指導内容精選の方向づけをする。

指導内容や教材の精選は、基礎・基本の習得とともに教育目標実現の視点からなされなければならない。教育目標との関連を図って、必要によってはある単元には時間を多く配当し、指導を強めるなどの配慮もなされるであろう。その方向づけをするのが学校の教育目標である。

d 教師の学習指導法改善の方向づけをする。

学校の教育目標とそれに基づいた指導計画が、いかに適切に作成されても、それを生かす理にかなった指導法がなければ、目標の達成はおぼつかない。「すじみちをたてて考える子」を目標にし、思考力をたかめることをねらっているが、実際の授業は、教師の講義中心の画一的な一斉授業であったり、児童が一人でじっくり考える時間も与えられない指導では、目標の達成は図れない。授業と学習の過程のなかで、教えることと考えさせること、体験させること等をもっと明確にし、児童は教えを受けて主体的に学ぶ、ともに学ぶといった豊かな授業をつくりだすよう、全教師が努力しなければならない。

教育目標の実現をめざすすべての教師が、授業の場でいかなる指導法をとるのか、目標実現の視点から真剣に話しあい、年度当初から共通認識に立って指導にあたることがのぞまれる。

(f) 教育目標と教科の目標との関連のさせ方

前項では、P11に述べたとおりの関連のさせ方を考えた。

ほかに、図3にみられるような関連のさせ方が考えられよう。

昨年度の当教育センターの調査結果によると、おおよそ④の関連は考えたと回答した学校は、72.5%であった。この結びつきだけでは教科指導を大くで方向づけるような包括的なとなえ方しかできないと思われる。

つぎに、⑤の関連になると、単元・題材の目標と教育目標との結びつきが具体的にみえてくるものとなろう。教育目標でねらうどの要素を、どの教科のどの単元・題材と結びつけ、目標の実現を図っていくのか、そのおさえが可能となり、年間指導計画に反映させていくことができる。

さらに、1時間1時間の授業で、教育目標との関連を図っていくには、⑥の関連が考えられよう。もちろん、これは⑤のしっかりしたおさえがあってはじめて可能になる。⑥の結びつきを可能にするには教育目標でねらう価値・要素の分析、教科の目標分析が徹底的におこなわれることが前提となることはいうまでもない。

なお、点線で示した関連のさせ方は、対比させるレベルが違いすぎ適当であるとはいえないだろう。

(g) 具体目標「すじみちを立てて考える子」の実現を図る例

「すじみちを立てて考える子」という具体目標を教科指導の中で達成していく場合、K小の実践例をもとにつぎのように考えた。子どもが意味のある考えを展開していくためには、思考のみちすじを子どもなりにわきまえなければならない。「すじみちを立てて考える子」とは、しっかりした思考のみちすじにそって、自分なりの考えを深めていくことができる子とおさえ、その過程を次のように考えた。

- a { 問題に直面し、問題意識をもつ。(おかしい、ふしぎだ、なぜだろう)
- b { 問題を主体的にとらえる。(どんなことがわかればよいのだろう)
- c { 解決の見通しをもつ。(こうではないだろうか、きっとこうだろう、よしやってみよう)
- d { 解決の計画を立てる。(どうすればわかるのだろうか)
- e { 解決にむけて、積極的に努力する。(自分でやってみよう、これでよいのだろうか)
- f { 自分なりの結論がでたら、正否を確かめる。(自分の考えが正しいか確かめてみよう)
- g { わかったことのまとめをする。(よしよかった、練習をしてみよう)
- h { 新しい問題に気づく。(ほかの問題もやれるだろうか、やってみよう)

このようなa～hへと進む思考過程を「すじみちを立てて考える子」の骨子としておさえた。

◎算数科の実践例

上の「すじみちを立てて考える子」についての考え方を受けて、算数科の目標として「具体的な問題場面のとりあつかいとおして、適切な見通しをもち筋道を立てて考える態度を育てる。」と設定した。

そして、次のような教科指導の構造を考えた。

図3 教育目標と教科の目標の関連

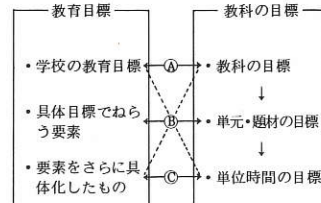
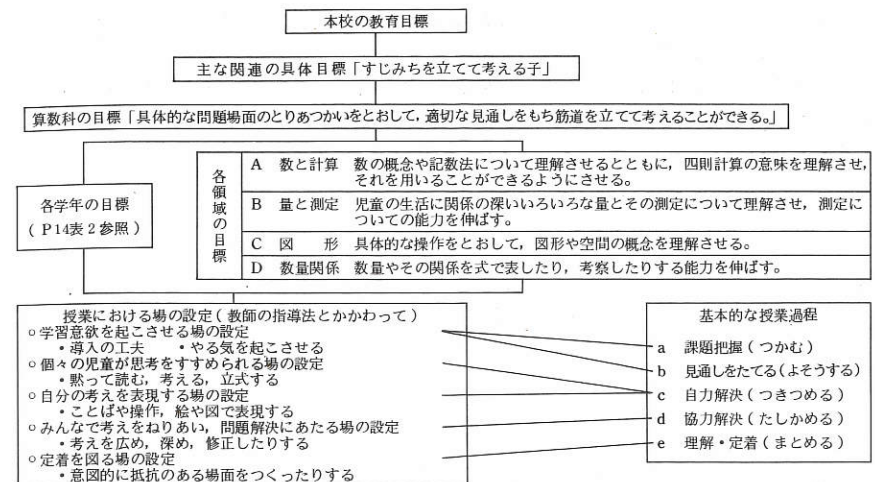


図4 教育目標の具体化と算数科指導のかかわり



○ 第2学年算数科学習指導案例

- 1 第2学年算数科目標(教育目標と算数科第2学年の目標との関連をおさえて作成したもの)
 - 加減計算やかけ算や図形について、日常場面に即して考え、考えたことをわけをつけて説明できる。
- 2 単元 かけ算(2)の目標(教育目標と単元の目標との関連をおさえて作成したもの)
 - 既習の5の段、2の段の九九の構成をもとに、3の段などの九九の構成ができる。
 - 具体的な場面に即して、かけ算が用いられる場を知り、3の段、4の段、6の段、7の段の九九をとえることができる。
- 3 指導にあたって(教育目標実現の視点からの教師の指導観を書く)
 - 具体目標「すじみちを立てて考える子」は、数学的な考えを伸ばすことそのものである。低学年の算数科でねらう児童のあらわれとして、考えたことを順序立てて説明したり、考えたことを理由をつけて説明できる、とおさえている。つまり、考えた結果としての答えだけでなく、「……だから」「そのわけは……」というように、考えた根拠をはっきり意識させて、考える力をつけていきたい。
- 4 本時の指導(教育目標実現の立場からの具体的なおさえを書く)
 - かけ算が用いられる具体的な場面とおして、自分の考えた方法をはっきりいえるようにさせる。
- 5 指導過程

学 習 活 動	主な発問と指示	予想される児童の活動	指導上の留意点 □ 評価の観点
1. 課題をつかむ	○ これはなんでしょう。 ○ このテントウ虫で、何の段の九九がつくれるかな。 ○ きょうは、テントウ虫のホシの数を考えて、7の段のつくり方を勉強しよう。 ○ 1匹あたりのホシの数はいくつですか。 ○ 3匹ではホシの数はいくつかな。	○ ナナホシテントウ虫だ。 ○ ホシが7つだから、7の段がつくれる。 ○ 足が6本だから、6の段がつくれる。 ○ 7つ ○ 7の3倍だから21 ○ 7 + 7 + 7だから21	○ テントウ虫と遊んだことなど想起させ、関心をもちさせていく。 1あたりの数は7で、$\times 1$ $\times 2$はいくつ分であることをつかんだか。
2. 自分なりの考えで予想する			

イ 道徳の指導をととして実現を図る

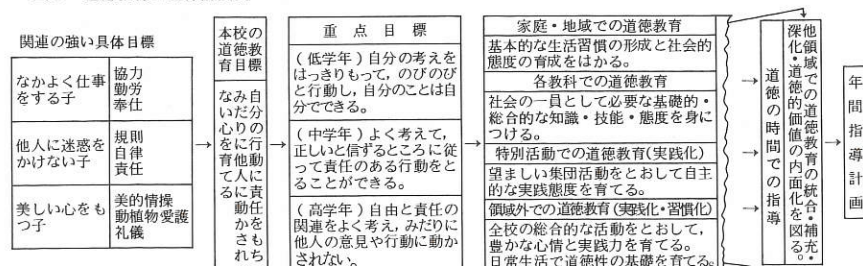
学校における道徳教育は、学校教育の全領域のなかで、しかも、すべての教育活動をととして行うことを基本としている。そのために、学校には道徳教育の全体計画がたてられている。

学校の教育目標も道徳教育のねらいも、究極的には人間形成をめざすものであるから、両者には共通するものが多く、関連性は極めて強い。したがって、両者のねらいを最大限に融合させ、教育目標の実現をめざしていくようにしなければならない。

そうすれば、学校の教育目標を基盤にすえたその学校の道徳教育によって、児童の道徳性をつちかう活動が、より具体的に展開されるようになる。

㌦ 教育目標との関連を図った道徳教育の全体計画例

図5 道徳教育の全体計画例



年間指導計画の作成にあたっては、学校の教育目標との関連を考え、目標実現のために特に必要な内容について、重点的に取り上げるとか、幾つかの内容を関連づけて取り上げてみることも考えられてよいことである。

本校の道徳教育の目標と関連の強い道徳の内容は、4の「自分の正しいと信ずるところに従って行動し、みだりに他人に動かされない。」であり、さらに、それに関連する内容として、

- 7の「正を愛し不正を憎み、勇気をもって正しい行動をする。」
- 8の「正しい目標の実現のためには、困難に耐えて最後までやり通す。」
- 9の「人の忠告をよく聞いて自分を反省するとともに、思慮深く節度のある生活をする。」
- 19の「偏見をもたず、だれに対しても公正公平にふるまう。」
- 5の「自他の自由を尊重し、自分の行動に責任をもつ。」
- 22の「権利を正しく主張するとともに、自分の果すべき義務は確実に果す。」

などが考えられる。道徳の主題設定にあたっては、これらの内容が指導できるものを多くあげ、特に力を入れて指導にあたるなど配慮がのぞまれる。

㌦ 授業の実践例

○第4学年 道徳学習指導案

1. 主題名 あの時ほくの気持ち (4 自主自律)
2. 主題設定の理由
- (1) 本校の道徳教育目標との関連

本校の道徳教育の目標「自分の行動に責任をもち、みだりに他人に動かされない心を育てる」にせまるために、資料をととして、自主的・自律的な行動の必要性を理解させ、あらゆる場をととして実践の見とどけをしていきたい。

(2) 価値について (3) 児童について (4) 資料について……略

3. 本時のねらい

自分でよく考え、正しいと信ずるところに従って行動しようとする態度を育てる。

4. 指導過程

段階	学 習 活 動	主な発問と予想される反応	指 導 上 の 留 意 点
導 入	1. 教師の小さい頃の話聞いて、人の言動に動かされた経験について話し合う。	○周りの人の言う通りして、自分の考えや予定がくったことはありませんか。	○教師の話しを起点として、児童の身近な経験を発表させ、焦点をしぼっていく。
展 開	2. 資料「あの時ほくの気持ち」を読んで話しあう。 (1) ほくのとした態度についての感想	○主人公「ほく」のとした行動をどう思いますか。 ・自分の考えをもたない人です。 ・石田君に注意しようと思ったのに、野球の仲間に入ってしまった。 ・ガラスを割った後、そのまま家に帰ってしまった。	○一方的に、ほくの行動を批判すると思われる。理由づけをさせながら、「ほく」のよくない面を洗いざらい出させる。
開	(2) ガラスを割ってから家へ帰るまでのほくの気持ち (3) ほくの態度や気持ちに何が足りないのだろうか。	○ガラスを割ったあと、ほくは謝る気持ちがあつたのだろうか。そのまま家に帰ったほくの気持ちが、どのように変わっていったのでしょうか。 ・たいへんだ。どうしようか。…家へ帰っても思ひ続けた。	○謝る気持ちを持ちながら、みんなに引きずられてしまうまでの、多少やむを得ない「ほく」の気持ちをわかっていく。

ウ 特別活動の指導をととして実現を図る

特別活動は、児童の集団の生活や活動の経験をととして、市民としての望ましい態度・習慣や実践意欲を形成することをねらいとしており、全人教育をめざす今日の学校教育では、なくてはならない領域として位置づけられている。

特別活動においては、特に学校の創意工夫が要請されている。

特別活動では、学校の特色を生かし、児童や学校の実態にふさわしい学校独自の計画をもつことが必要なのである。

したがって、特別活動の指導にあたっては、「集団の一員としての自覚と、協力して生活を創る自立の・実践的な態度を養う」というこの領域の基本的なねらいに、学校の教育目標をどうとけこませ実現を図っていくかについての工夫が必要となる。

㌦ 特別活動の指導計画

特別活動の指導計画をたてていく場合、ともすると今まで学校が実施してきた実績が重視されやすい。これも大切なことではあるが、学校の教育目標の実現という視点から、きびしい見直しをすることが必要となる。

例えば、学校行事について考えてみると、もちろん、学校の置かれている諸条件や、学校規模、施設など十分に考慮に入れて、実践にあたらなければならないが、それを十年一日のごとく続けていたり、朝会をはじめ、始業式や終業式のような定例的な行事もマンネリ化しては、教育目標の実現はおぼつかない。

年度当初の指導計画作成にあたっては、教育目標のねらいを十分もりこみ、内容的には、学校の伝統を尊重しながらも、新しい発想を取り入れるなど、児童にとって新鮮で感動的な活動をもりこんでいく必要がある。

(イ) 第6学年学級会活動の実践例

a 特別活動の目標（学校の教育目標との関連で設定したもの）

他人の立場に立ってものごとを考え、進んで実践するようにする。

b 特別活動・高学年の目標

高学年としての自覚に立ち、協力してよりよい学校生活を送れるよう自ら進んで行動する。

c 本時の学級会活動に関連する教育目標 表9 児童の読書計画例の一部

○「読みとる力をつける子」の第6学年目標、「自分で読書計画をたてて実行する子ども」

具体目標「自分の考えを発表できる子」

表9は、学級の図書委員長から、学級会活動の時間に提出されたものである。二か月後に予定されている児童会の読書まつりを充実させるために、学級の図書委員が、事前に学級担任の指導を受けながら、話し合いをもち決定した議題である。

なお、この学級会活動での話し合いは、年度当初からの読書計画の一部にあたるものである。

エ その他の教育活動をととして実現を図る

業間活動をととしての体力づくりと体育の日常化、ゆとりの時間の勤労体験学習などがあるが、これらの活動もすべて教育目標の実現ということを根底において、計画、実践がなされることが大切である。

（具体例 略）

③ 年間をととした評価活動

学校におけるすべての教育活動は、……評価 → （改善） → 計画 → 実践 → 評価……という一連の過程を経て、循環的に高まっていくものである。とすれば、学校における評価というものを、ものごとの結果だけをみる仕事としてではなく、いわば動的な仕事としてとらえたい。

すなわち、教育活動の過程をできるだけ分節的にとらえ、必要な段階で随時的確な評価を行い、教育活動の計画、実施の面にフィードバックさせていくようにしていかなければならない。

教育活動は、一面からみれば、常に指導と学習の過程であるが、他の面から見れば評価の過程であるといえよう。したがって、指導と評価は表裏一体のものであるととらえ、評価を教育方法上の単なる技術としてではなく、教育の本質にかかわる常時活動としてすすめていくことがのぞまれる。

評価の対象は、学校における教育活動のすべてにわたる。そこで、評価の活動は多岐にわたり、対象によって評価の方法も変わってくると考えられる。

ア 教育目標の実現にかかわる評価

P5の図1に示したとおり、評価活動は、週指導計画については、週ごと、月指導計画については、月ごとというように、短いサイクルのものから、学期指導計画については、学期ごとという比較的長いサイクルのものまで考えられる。

すべての教育計画・実践は、学校の教育目標の実現をめざしてのものであるから、週ごと、月ごと、学期ごとの評価を的確に行い、それを集積し、分析、考察することによって、学校の教育目標の実現にかかわる評価につなげていくことができる。

一方、大もとの教育目標に照らして、児童の状態はどうなっているのか、年度末に総括的に評価することも必要であろう。

前者の教育活動の分節ごとのいわば形成的な評価と、後者の総括的な評価の両者があいまって、学校の教育目標の実現にかかわる評価が成り立つと考えられる。

なお、教育計画に即して、評価活動が、何を、いつ、誰が、どのようにして行われるのかを、年度当初に計画しておくことが大切である。

評価計画の立案にあたっては、評価の目標を決める → 評価する対象と観点を決める → 評価方法（自由記述、評定尺度、チェックリスト、生徒の自己評価など）を決める → 評価の分担組織（企画委、学年会、職員会議、生徒指導部、学習指導部など）を決める → 評価の時期（随時、週末、月末、学期末など）を決める、などを行い、年度当初に評価計画をたておくことが必要となろう。

イ 評価の実践例

(ア) 月ごとの学校の指導計画における評価の例

表10 学校の指導計画

10月 学校の 指導計画	児童ののぞましいあらわれ							指導の重点	経営の視点
	①自分の考えたことをわけをつけてはっきり言ったり、文に書いたりできる。	②自分で読書計画をたて、すすんで読書をする。	③心と体をきたえる子	④不注意によるけがをしない。	⑤体育行事で全力をだしてがんばる。	⑥姿勢を正して、学習や行動ができる。	⑦よりきれいに考えて清掃できる。		
日	1	2	3	4	5	6	7	⑧授業時の発言、自分の考えをはっきり言える指導を。 ⑨読書意欲を喚起する指導の工夫を。 ⑩協力、勤労を奨励	⑪発言、発表、全学年さらに強化 ⑫読書週刊の設定 ⑬姿勢指導の強化 ⑭たてわり清掃の徹底
曜	土	日	月	火	水	木	金		
行事									
評価 ↓ 改善策	児童ののぞましいあらわれ							11月の指導の重点	11月の経営の視点
	①については、中学年はよくなったが、低・高学年はよくない。	②読書に対する関心高まる。	③心と体をきたえる子	④低学年が多い。	⑤運動がらみ、中学年に多い。	⑥朝会時の姿勢よくなる。	⑦きまりきった清掃しかない。		
	⑧低学年、あとしまつきちゃんとできない。	⑨下級生への指導徹底しない。		⑩11月の指導の重点	⑪低・高学年の発言指導（国語と学級会活動を中心に）	⑫たのしい体育の工夫	⑬読書意欲をさらに高める。	⑭全校集会で発言指導を徹底（事前指導を含めて）	⑮秋季運動会の成功を期す
								⑯第3次新刊図書購入（内容を吟味）	

表10の学校の指導計画における評価は、おおよそ次の順序でなされる。

- 10月の児童ののぞましいあらわれにてらして、自分の学級の評価を行う。
- 学級の評価をもち寄り、学年会で話しあい、学年全体の評価をまとめる。
- 各学年から、評価委員が1名ずつでて、評価委員会を開き、学校全体の評価をまとめる。
- 評価委員会の評価のまとめをうけて、企画委員会で指導の重点、並びに経営の視点が検討され、11月の学校の指導計画が作成される。
- 11月の学校の指導計画が職員会議に提出され、11月の指導の重点、経営の視点、児童ののぞましいあらわれについて共通認識を図る。
- 11月の行事とも関連を図り、実践していく。

(イ) 学年目標について、学期ごとに達成目標を設定しての評価の例

具体目標「自分の考えを発表できる子」の第3学年の目標「人の話をしっかり聞き、自分の意見もはっきりと発表する子ども」を、学期ごとに達成目標を決め(表11)評価していく。これは教師による児童個々の評価と学級・学年のまとめの評価を行っていくが、児童の自己評価も可能であろう。

表11 学年目標についての評価の例

1 学 期	(達成度)	2 学 期	(達成度)	3 学 期	(達成度)
- 話をする人に目をつけ、うなずきながら最後まで聞ける。 - はきはき話すことができる。	A B C 	- 静かに人の話を聞き、わからないところを聞きかえす。 - 語尾をはっきりさせ話すことができる。	A B C 	- 人の話をよく聞き、自分の考えを言える。 - 主語、述語が整い、相手にわかるように、はっきり話せる。	A B C

(ウ) 通知票等に評価を表す例

教師は、教育目標にてらして、児童の現状はどうなっているかを的確にとらえ、父母や児童に知らせ、目標の実現にむけてさらに努力するようにさせていくことも大切である(表12)。学校の教育目標に基づいた評価の観点や項目を工夫して行うことが望まれる。

(イ) 児童による自己評価 表12 第2学年の通知票の例

評価は、教師が児童を対象にして行うのが原則である。

だが、教育目標には、児童の心情にかかわるものも多いことから、児童自身に自己評価させることも大切である。

④ 児童の自覚を高める働きかけ

学校が教育目標を設定しても、児童がそれを主体的にうけとめ、自分のものとしてとりくみ、行動化し態度化するまで高まっていかなければ、目標の実現はおぼつかない。

教師の側からは、目標を具体化し、あらゆる教育活動に反映させていく努力を継続すると同時に、児童には、その具体化された目標をうけて、自分のめあてを設定させ、目標達成に向けて努力するよう指導することが大切である。目標を日常生活と結びつけ、「私の向上の道しるべ」を記録させ、目標実現を図っているなどは、その一例である。また、目標を児童個々人がとらえるだけでなく、児童会がそれを積極的にうけとめ、目標実現に向けて、〇〇運動を展開させていくことなど、児童会や学級会活動のなかで、教育目標の実現に向けて行動化していく指導の手だても大切である。

また、学校の教育目標を、児童のめあてとなる分かりやすい表現に直して、児童に徹底を図ることも効果的である。学校のシンボルマークと教育目標の頭文字をあわせ、親しみやすく設定するなどはその一例である。

教科の授業や学校行事等の具体的な活動と教育目標との関連が明確に図られておれば、その活動をととして、児童の教育目標に対する理解も深まり、教師と一体となって目標にとりくむ充実感も味わえることは言うまでもないことである。つまり、具体的な活動をととして、目標が意識され、そのことによって、目標にこめられている価値や願いを身につけていくという好ましい循環が期待されるからである。

		児童氏名		
		行いやくらしのようす(◎よい ○ふつう △もっと努力しよう)		
教育目標	努 力 の よ う す	1学期	2学期	3学期
力をあわせて、みんなのために働く子	1. そうじのしかたがわかり、力をあわせてそうじをする。			
	2. 自分の物をたいせつにする。			
	3. 学級・学校のをたいせつにあつかう。			
	4. しっかりあいさつができる。			
	5.			

(2) 学校の教育目標を実現する過程と運営活動

① リーダーシップ

学校の教育目標の実現にむけて教職員一人ひとりが、自分が分掌した校務をととして努力したとしても、いろいろな理由で差がでてくることがある。ときには、それが円滑な校務運営に支障をきたすことになりかねないこともある。そこで、それぞれの部門で中心的な立場にある者は、自分の担当する部門に絶えず目を配り、運営目標の達成のための活動が効率よく実施できるように、リーダーシップを発揮することが必要となってくる。また、教育活動全体の連絡・調整に当たる立場にある者は、運営目標の総合的達成をめざす立場にたってリーダーシップをとり、各学年・各部門等の連絡調整をはかることになる。そのために、月ごとに運営計画を作り、それをもとにして教育活動の円滑な運営をはかることも適切な方法の一つといえる。P32の表13はその例である。なお、校長・教頭には、教育目標の実現に向けて、教育活動及び運営活動が適切になされるために、つねに強力なリーダーシップが要請されていることはいうまでもない。

表13 月ごとの運営計画の例

1月 学校・学年(学級)運営計画

T小学校

目標	1. 新春を迎え、自分のめあてをはっきりたてて努力する態度をめざす。○年頭のめあて ○3学期の努力目標をたてる 2. 冬季休業にむけて、年末年始の休みの反省をもとにして、計画をたてる。○体力づくり ○読書 ○交通安全				
努力事項	学習指導	生徒指導	図書館教育	体育・保健	
	○研修計画を受けて、基礎・基本の洗い出したものをもとに実施に移す(国・算) ○漢字・計算の進級テストをする(他略)	○新年のちかいを発表させる ○物を大切にする ・学校のもの ・みんなのもの ・自分のものに記名	○いろいろな本を読ませる ○読んだ感想を発表し合う ○読書調べをする ○図書破損状況調べる	○スキーマラソンを実施する ○かぜの予防にうがいをする ○身のまわりをきちんとする	
反省					
努力6月目標	1. 新春を迎え、自分のめあてをはっきりたてるとともに、残り少なくなった小学校生活を有意義に送るためのくふうをみんなで考え実行する。 2. 冬季休業の過ごし方を、1とのかかわりで計画をたて実行する。				
努力事項	学習指導	生徒指導	図書館教育	体育・保健	
	○3学期単元の基礎・基本をもとに授業をおこなう(国・算) ○漢字・算数の進級テストの全員合格をめざす ○学習での努力目標をもつ	○各自の新年のちかいを発表し、話し合い努力する ○物を大切にする 用具のあとしまつをきちんとする ○自分の進路を考える	○自分の得意でない分野の本も読んでみる ○感想文を発表し合い修正する	○スキーマラソンの全校指導のリーダー役になる ○かぜをひかない工夫をする ○寒さに負けず積極的に外遊びをする	
反省					

② 学年・学級の経営と評価

学年・学級の経営は、学校の教育目標の実現をめざして行われるわけであるが、その基となる経営計画については、年間計画の作成はもちろんのことであるが、それを学期、月等に具体化された形のものも考えられてよいと思う。つまり、学年・学級の目標を達成するために、この月はどんなことに努力すればよいのかということが明確になっておれば、実践活動のめやすがつくことになるし、教育目標の実現に向けての斉一性のある教育活動ができるようになると思うからである。

ところで、このような形で進められる学年・学級経営の中にも、当然、評価—計画—実践—評価のサイクルが入ってくるわけで、つねに形成的評価の手法を用いてフィードバック機能を重視した経営が必要がある。県内の現状をみると、この面でかなり手薄なようすが感じられるのである。実践に直接結びつく場での経営であるために、実践活動にのみ目が向いて評価がなおざりになるのか、あるいは、計画の段階からして評価についての意識が低いからなのか、とにかく、つねに評価をふまえて、つぎの実践活動を修正していくような方向をとらなければ、教育目標の実現を具体的な活動の場に反映させることが困難になってくるのである。

③ 教育活動を支える条件づくり

学校の教育目標の実現をめざして行う教育活動が存分に行われるかどうかは、学校の運営目標の具体的方策がどのように実行されるかに深くかかわっている。したがって、教職員一人ひとりは、自分の分掌した校務の遂行が学校の教育目標の実現をめざすものであることを十分自覚して、校務の遂行に最大の努力をしなければならない。

たとえば、さきにあげた図書館教育経営の例を見ると、運営目標の具体的方策に示されている児童図書整備・読書時間の設定等が具体的に計画されてあげてある。この計画に基づいて、担当者は目標実現にむけて最大の努力をすることになる。もしも、それが十分になされなければ、教育目標である読みとりの力をつける子の実現が危ぶまれることになるからである。

④ 共通理解と協力体制

学校は、学校の教育目標の実現をめざして運営される。運営にあたっては、学校の教育目標の設定から評価までの各段階で、教職員一人ひとりが常に全校的な立場にたって、担当している職務に全力を投じなければならない。

それには、学校の教育目標に対して、全教職員が共通した理解を必要とする。さらに、それをもとにして協力体制をつくって、学校の教育目標の実現にむかって教育活動をすすめる必要がある。このことに関して、昨年度実施した調査を見ると、管理職と教員間の考え方の違いや、年代による意見のくい違いが極めて鮮明になっていることがわかる。学校の教育目標の実現を図るための、教職員の共通理解にたった協力体制づくりは今後の大きな問題である。

Ⅳ 研究のまとめと今後の課題

この研究は、昭和57・58年度の2か年にわたる研究である。まず、2年次の研究を要約し、ついで2か年の研究を総括して、いくつかの課題を提言したい。

1 2年次の研究の要約

1年次の研究から三つの課題をひきついだ。研究を進める手がかりとして、その中の教育目標と実践・評価等との関連をどう結合すれば、目標の実現がはかれるかを中核にすえ研究を深めた。

(基本的な考え)

- ① 学校の教育目標はかかげて意味をなすのではなく、実現してこそ意味をなし生きていくものである。この考えにたてば、教育目標を単なるスローガンととらえたり考えたりすることは厳に戒めなければならない。学校は一人ひとりの児童に教育目標を実現する教育をいとなむことが、もっとも大きく課せられた任務であることを理解し認識して行動にうつす自覚が必要である。

すなわち、学校は全児童を意図した状態に教え、導き、育てるため教育課程を編成し実施するといえるのである。

(研究の意図)

- ② 学校は意図した教育目標をどうすれば児童と教師の教育活動に反映することができ、教養育てるという教育本来のいとなみとなり得るのか。また、日々の教育活動を実践していくなかで、児童を見つめたり、調整をはかったり、つぎの手だてをこうじたりするための情報の収集や分析の手法はどうあればいいのか。こうした一連の実践研究を積みあげればほんとうに児童を目標の実現まで導くことが可能なのかどうかを明らかにする。

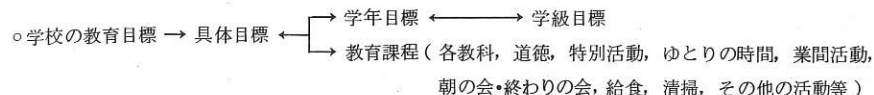
(研究の内容)

ある小学校の実態をもとに教育目標を設定し、この教育目標を実現するみちすじについて明らかにしてみた。ついで、このみちすじが目標実現のみちすじとしての価値を確証づけるため、県内のすぐれた実践校を対象に聴き取り調査を行い、これらに見られる経営実践の解析をとおして実現のみちすじを一層確かなものとしてあらわした。その要約が以下である。

- ③ 目標の設定ではつぎの点に配慮した。一つは公教育からの課題は何か。二つは地域の教育課題は何か。この二つを学校の教育課題としてとらえ三つの教育目標を設定した。
- ④ 学校は校長をはじめとして教職員の教育力を結集して教育目標の実現につとめなければならない。教育目標の具体化とあいまって組織・運営面での機構や分掌を含味して構成し、ち密な指導計画をつくる一連の実現のみちすじを全体構造図であらわした。中でも教育活動とそれを支える運営活動が一体となって機能するとき、充実した学校経営となることが明らかになった。

目標の実現は児童と教師の日々充実した教育活動の実践にのみ見いだすことができ、教育活動にはいつも目標の意図が含まれていなければならない。しかし、教育目標をそのままの形で教育活動に反映させないまぜることは無理があり、分析し具体化していく必要がある。その手法としてつぎ

の方法をみ出した。



具体目標から学年・学級への手法は従前からどの学校でもとられている手法で、これに対し具体目標から直接教育課程へ反映させる手法はこれまでの実践では空白となっていた部分である。

- ⑤ 目標の実現という観点で日々の授業をとらえるとき、教職員一人ひとりの目標に対する意識が大きく左右するといわざるをえない。教育目標をどれだけ意識した授業を展開しているかがかぎであり、これの改善をなくして目標の実現はあり得ない。

改善の方途はこれまでに述べてきたすべての内容であるが、要するに学校の教育目標の実現に向けて誰もが、いつでも、どこでも活動できるよう用意周到な計画と準備をおこなうことである。ここでは教科、道徳、特別活動の授業にのぞむときの学習指導案にあらわし活用することにした。

また、授業で欠かしてならないのは評価活動である。指導と評価は表裏一体の関係にあるといわれ、診断的評価、形成的評価、総括的評価のそれぞれを授業過程とどう有機的に関連づけ位置づけていくかであるが、ここでは短期サイクルと長期サイクルの形であらわしてみた。

2 2年間の研究の総括

1年次は教育目標の設定・実践・評価の3過程と目標実現の阻害要因・必要要件についてアンケート調査を実施し分析研究を行った。結果から見ると県内の小、中学校はいずれも目標の実現には高い関心を示していることが明らかになった。しかし、関心の高さとはいくらに現実には目標の実現との間にミゾがあるのも紛れもない事実であった。

また、ここから目標の実現にたちはだかる課題(病理性)も明らかになり、2年次の研究へと託された。このこととさきの要約から、2年次で取り組んだ課題については一応解決の方途が得られたものと確信する。

3 今後の課題

これまでの研究をとおして学校の教育目標の達成をはかることはなまやさしいことではないかもしれない。しかし、手をこまねいて待ちのぞんでいても解決策はでてこない。学校経営とは何か、教育目標とは何かの問いなおしを常にやりながら、日頃の実践をち密に積み上げる中からおのずと解決の手段なり、方法なりが見えてくるのではなからうか。

そのことから、この主題の研究の方向を展望するとき、まずこれまでの研究で明らかになったところとそうでないところを整理する必要がある。そしてその整理されたことがらでとらえるなら、どうしても教職員の目標に対する共通理解の不十分さがあげられそうである。そこで次年度の研究の課題として考えられることは、教職員の学校経営への参画の視点と授業にのぞむ視点をつき合わせ研究を深めるなら、この研究の主題も大すじで解決の方途を見いだすことができるものとおもう。

聴き取り調査対象校

市町村名	小学校名	市町村名	小学校名
山形市	第八小, 第九小, 南小	真室川町	大滝小
天童市	高橋小	高畠町	亀岡小
寒河江市	寒河江小	長井市	致芳小, 豊田小
大江町	左沢小	鶴岡市	朝陽第一小, 朝陽第六小
朝日町	和合小	酒田市	宮野浦小
尾花沢市	明德小, 玉野小	平田町	東陽小
舟形町	舟形小		

主な参考文献

- ・小学校学習指導要領 文部省
- ・小学校指導書・教育課程一般編 文部省 昭和53
- ・小学校教育課程一般指導資料 I 文部省 昭和56
- ・小学校教育課程一般指導資料 II 文部省 昭和57
- ・学校教育目標の具現化 浜松市立北小学校 明治図書 昭和54
- ・明日をひらく学校
 - －教育目標の具現化を求めて－ 前橋市立大利根小学校 第一法規 昭和56
- ・教職研修必携 河野重男 主原正夫 牧昌見 第一法規 昭和56
- ・教育課程の目標管理 伊藤和衛 明治図書 昭和55
- ・現代学校教育全集 3 学校教育目標 奥田真丈 小林一也 ぎょうせい 昭和55
- ・東京都公立小学校 学校評価規準 東京都教員委員会 昭和56
- ・初等教育資料 A6435 4月号 昭和58
- ・教育展望 55年3月号 教育出版 昭和55
- ・教育展望 58年1月号, 58年11月号 教育出版 昭和58
- ・学校の教育目標の具現化に関する研究(1) 山形県教育センター 昭和58

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月25日 発行

発行所 山形県教育センター

〒994 天童市大字山元字犬倉津2515

TEL 0236(54)2155～9

印刷所 中央印刷株式会社 天童営業所

天童市久野本4丁目15-12

TEL 0236(54)6263